

下邑遺跡
小長沢Ⅱ遺跡
小長沢鎌蓋遺跡

発掘調査報告

—県営農地整備事業小長沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告—

2024年

**下邑遺跡
小長沢Ⅱ遺跡
小長沢鎌蓋遺跡** 発掘調査報告

—県営農地整備事業小長沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告—

2024年

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 課

序

本書は、県営ほ場整備事業に先立ち、令和4（2022）年度に実施した下呂遺跡と小長沢Ⅱ遺跡、令和5（2023）年度に実施した小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

これらの遺跡は、富山県を代表する弥生時代終末期から古墳時代前期の墳墓や集落である国指定史跡王塚・千坊山遺跡群のある羽根丘陵と井田川につながる山田川とにはさまれた平野部で、現在は水田地帯となっています。

発掘調査の結果、下呂遺跡では古代から中世までの遺物が出土した自然流路、小長沢Ⅱ遺跡では古代以降の溝群、小長沢鎌蓋遺跡では自然流路がみつかり、自然科学分析によって旧地形や集落周辺での耕作地の様子も明らかになりました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録に現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

令和6年3月

公益財団法人富山県文化振興財団
埋 藏 文 化 財 調 査 課

例　　言

- 1 本書は富山県富山市婦中町小長沢に所在する下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡および小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山県からの委託を受け、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。
本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。
- 調査期間　令和4（2022）年10月7日～11月28日 ……下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡
　令和5（2023）年7月24日～8月1日 ……小長沢鎌蓋遺跡
- 整理期間　令和4（2022）年11月29日～令和5（2023）年3月27日
　令和5（2023）年8月2日～令和6（2024）年3月22日
- 3 調査に関する全ての資料と出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 4 遺跡の略号は、市町村番号（富山市は01）に遺跡名のアルファベット頭文字を継ぎ、下邑遺跡を「01SM」、小長沢Ⅱ遺跡を「01KS2」、小長沢鎌蓋遺跡を「01KS K」とし、遺物の注記にはこの略号を用いた。なお、小長沢Ⅱ遺跡については発掘調査時、A地区（01KS2-A）としていた。
- 5 本書の執筆および編集は、町田賛一が担当した。なお、下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡については、調査担当者である島山亮仁の所見をもとに町田が執筆した。また、第IV章6と第V章6の自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、渡辺正巳が執筆した。
- 6 本書で使用している遺構の略号は、以下のとおりである。
　S D：溝、S X：落ち込み、N R：自然流路
- 7 遺構番号は、遺構の種類に関わらず、遺跡ごとに連番とした。
- 8 本書で示す座標は、平面直角座標系第7系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海拔高である。
- 9 撃図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
　遺構　溝・落ち込み・自然流路：1/40、1/100
　遺物　土器・陶磁器：1/3、1/4　木製品：1/3
- 10 施釉陶磁器の釉の掛かる範囲は、1点鎖線で示す。
- 11 土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』および日本規格協会『JIS 標準色票－光沢版』を参照した。
- 12 遺物は、種類に関わらず、遺跡ごとに連番を付す。下邑遺跡1～16、小長沢Ⅱ遺跡17～31、小長沢鎌蓋遺跡32～39とし、本文・撃図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。
- 13 本文・撃図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。凡例は以下のとおりである。
① 遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
② 遺構規模・土器法量の()内は現存長を表す。残存部が少なく、計測不能なものは空欄とした。
③ 重量はg単位で示す。計測には電子秤（SHIMADU LIBROR EB-6205）を用いた。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）
朝田要、鹿島昌也、小澤信作、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会埋蔵文化財センター、納屋内高史、細辻嘉門、堀内大介

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	4
3 整理作業の経過と方法	4
第Ⅱ章 位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	8
第Ⅲ章 下邑遺跡	12
1 概要	12
2 層序	12
3 遺構	12
4 遺物	13
5 小括	13
第Ⅳ章 小長沢Ⅱ遺跡	20
1 概要	20
2 層序	20
3 遺構	20
4 遺物	22
5 小括	22
6 自然科学分析	33
第Ⅴ章 小長沢鎌蓋遺跡	40
1 概要	40
2 層序	40
3 遺構	40
4 遺物	41
5 小括	41
6 自然科学分析	45
第VI章 総括	53

報告書抄録

挿図目次

第1図	下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢縁蓋遺跡 位置図	第15図	小長沢Ⅱ遺跡 遺物出土状況図
第2図	下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢縁蓋遺跡 位置古図	第16図	小長沢Ⅱ遺跡 基本層序・遺構断面図
第3図	下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢縁蓋遺跡 米軍写真合成図	第17・18図	小長沢Ⅱ遺跡 遺物実測図
第4図	周辺の遺跡	第19～25図	小長沢Ⅱ遺跡 自然科学分析図
第5図	下邑遺跡 遺構全体図	第26図	小長沢縁蓋遺跡 遺構全体図
第6・7図	下邑遺跡 遺構平面図	第27図	小長沢縁蓋遺跡 基本層序・遺構断面図
第8図	下邑遺跡 基本層序・遺構断面図	第28図	小長沢縁蓋遺跡 遺物実測図
第9図	下邑遺跡 遺物実測図	第29～35図	小長沢縁蓋遺跡 自然科学分析図
第10図	小長沢Ⅱ遺跡 遺構全体図	第36図	周辺の遺跡における花粉分析結果
第11～14図	小長沢Ⅱ遺跡 遺構平面図		

表目次

第1表	下邑遺跡 既往の調査一覧	第10表	小長沢Ⅱ遺跡 遺構一覧
第2表	小長沢Ⅱ遺跡、小長沢縁蓋遺跡 既往の調査一覧	第11表	小長沢Ⅱ遺跡 土器・陶磁器一覧
第3表	調査一覧	第12表	小長沢Ⅱ遺跡 木製品一覧
第4表	調査の経過	第13～15表	小長沢Ⅱ遺跡 自然科学分析
第5表	調査・整理体制	第16表	小長沢縁蓋遺跡 遺構一覧
第6表	周辺の遺跡一覧	第17表	小長沢縁蓋遺跡 遺物一覧
第7表	下邑遺跡 遺構一覧	第18～20表	小長沢縁蓋遺跡 自然科学分析
第8表	下邑遺跡 土器・陶磁器一覧		
第9表	下邑遺跡 木製品一覧		

写真図版目次

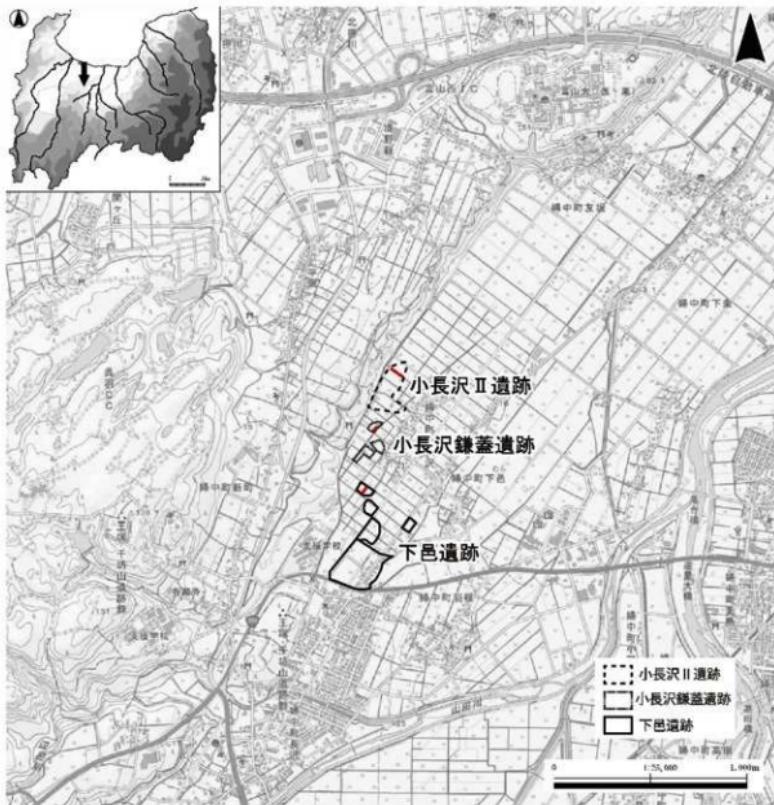
図版1	航空写真 (1946・2021年撮影)	図版11・12	小長沢Ⅱ遺跡 木製品
図版2	下邑遺跡 遠景	図版13	小長沢縁蓋遺跡 遠景
図版3	下邑遺跡 全景・遺構	図版14	小長沢縁蓋遺跡 遺構
図版4	下邑遺跡 土器・陶磁器	図版15	小長沢縁蓋遺跡 土器・陶磁器
図版5	下邑遺跡 木製品		
図版6	小長沢Ⅱ遺跡 遠景		
図版7	小長沢Ⅱ遺跡 全景・遺構		
図版8・9	小長沢Ⅱ遺跡 遺構		
図版10	小長沢Ⅱ遺跡 土器・陶磁器		

第Ⅰ章 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、富山市の西部で旧婦負郡婦中町の小長沢地区に所在する。小長沢地区に所在する土地改良記念碑（1966年建立）によれば、婦中町古里土地改良区によって昭和31（1956）～34（1959）年に近隣の新町地区と下邑地区とあわせて61町歩（約61ha）の土地改良事業区画整理が行われ、広大な水田地帯が広がっている。富山県農林水産部農村整備課では、生産基盤の整備、担い手への農地集積・集約化を進めるため、県内各所では場整備事業を行っている。小長沢地区では先の土地改良から60年近くが経ち、大区画のは場整備が必要とされ、41.1haを対象に平成29（2017）年から令和7（2025）年までの工期で経営体形成の農地整備事業が計画された。



第1図 下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡位置図（1：25,000）

富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）では、この事業を整備するにあたり遺跡への影響が考えられることから、事業地内に存在する下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡について平成30（2018）年度から令和3（2021）年度まで、遺跡の有無を確認するため大規模な試掘調査を行った。

平成30（2018）年度の試掘調査は、下邑遺跡（39,800m²）を対象に行われ、縄文時代晚期の土坑、弥生時代後期の土坑、古代の柱穴や溝を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器、近世陶磁器が出土している（細辻2019）。

令和元（2019）年度の試掘調査は、下邑遺跡（対象面積23,941m²）で古代の溝を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、伊万里が出土している。小長沢Ⅱ遺跡（対象面積14,021m²）では、弥生時代の溝・ピットを検出した。遺物は弥生土器、古墳時代の土師器、中世土師器、珠洲、墓石が出土している（細辻2020）。

令和2（2020）年度の試掘調査は、下邑遺跡（対象面積31,820m²）で古代の溝・ピットを検出した。遺物は縄文土器、古代の土師器・須恵器、中世土師器、越中瀬戸、近世陶磁器が出土している。小長沢Ⅱ遺跡（対象面積2,480m²）では、中世の溝・ピットを検出した。遺物は中世土師器、珠洲、中世の銅錢、越中瀬戸が出土している（細辻2021）。

令和3（2021）年度の試掘調査は、小長沢Ⅱ遺跡（対象面積40,700m²）で弥生時代・古代・近世の溝を検出した。遺物は弥生土器、古代の土師器・須恵器、珠洲、近世磁器が出土している（細辻2022）。

この試掘調査結果を受けて富山市教育委員会では、令和3（2021）年度に遺跡範囲の変更を行った。これによって小長沢Ⅱ遺跡は遺跡範囲が縮小し、西側は分割されて小字名の鎌蓋から新たに小長沢鎌蓋遺跡と命名された。また、下邑遺跡は遺跡範囲東側がなくなり、縮小となった（富山県2022）。登録時の遺跡種別は、下邑遺跡が縄文・弥生・古代・中世・近世集落、小長沢Ⅱ遺跡が縄文・古代・中世・近世集落、小長沢鎌蓋遺跡が弥生・古代集落である。

公益財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課では、これらの遺跡のうち揚整備事業による工事で遺跡を棄損する掘削工事が行われる水路部分について、富山市教育委員会を介して富山県農林水産部農村整備課からの依頼を受け、発掘調査（本調査）を実施した。調査面積は令和4（2022）年度の下邑遺跡158m²と小長沢Ⅱ遺跡281m²、令和5（2023）年度の小長沢鎌蓋遺跡56m²である。

引用文献

- 細辻泰門 2019「下邑遺跡」「富山市の遺跡物語」No20 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 細辻泰門 2020「下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡」「富山市の遺跡物語」No21 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 細辻泰門 2021「下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡」「富山市の遺跡物語」No22 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 細辻泰門 2022「下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡」「富山市の遺跡物語」No23 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 富山県埋蔵文化財センター 2022「富山県埋蔵文化財センター年報－令和3年度－」

（2）既往の調査

富山県埋蔵文化財センター刊行の『富山県埋蔵文化財センター年報』や富山市教育委員会埋蔵文化財センター刊行の所報『富山市の遺跡物語』をもとに調べてみると、既述の県営は揚整備事業以外の発掘調査では個人住宅建設や倉庫の建設などに伴う小規模な試掘調査程度しか行われていない。これらの試掘調査では、構造や遺物はほとんどみつかっておらず、遺跡の具体的な内容をつかむには至っていない。

第1表 下邑遺跡 既往の調査一覧

調査	調査地	調査市町	調査組織	対象面積 (m ²)	純面積 (m ²)	調査年月日	調査原因	検出遺物	出土遺物	文献
1	新小町小長沢3-1	調査	市教委	650	65	2003/12/16	施設住宅建設	なし	なし	1
2	新小町小長沢4B-1	調査	市教委	480	30	2003/6/11	個人住宅建設	なし	なし	2
3	新小町下呂浜1	調査	市教委	355	11	2014/6/14	西側農地の整理	なし	なし	3
4	新小町小長沢205-1	調査	市教委	650	15	2014/12/25	個人住宅建設	なし	なし	4
5	新小町小長沢北前田207	調査	市教委	670	33	2017/6/12	個人住宅建設	なし	なし	5
6	新小町小長沢151-1	調査	市教委	540	10	2018/6/16	個人住宅建設	なし	なし	6
7	新小町小長沢地内	調査	市教委	38,000	242	2018/10/15～ 2018/11/12	新規土塁整備	純土上層 (既生)、未生土層 (既生)、古代漆灰、古代漆	純土上層、未生土層、灯芯嘴、 十姫屋、江戸内漆器	6
8	新小町下呂浜地内	調査	市教委	236	6	2019/5/29	個人住宅建設	なし	なし	7
9	新小町小長沢地内	調査	市教委	22,911	163	2019/10/20～ 2019/11/13	新規土塁整備	古代漆	純土上層、未生土層、土師器、 中世土器、中世漆器、漆器、 越中廻紋、少子印	11
10	新小町小長沢地内	調査	市教委	31,820	163	2020/6/14～ 2020/11/13	新規土塁整備	古代漆・ビット	純土上層、土師器、瓦器、 中世土器、中世漆器、 越中廻紋、少子印	8

第2表 小長沢II遺跡、小長沢錦蓋遺跡 既往の調査一覧

調査	調査地	調査市町	調査組織	対象面積 (m ²)	純面積 (m ²)	調査年月日	調査原因	検出遺物	出土遺物	文献
1	新小町小長沢付近180-1井	調査	市教委	620	31	2013/6/25	個人住宅建設	なし	EH・陶器	3
2	新小町小長沢地内	調査	市教委	14,021	85	2013/10/25～ 2015/11/6	新規土塁整備	青白磁・ビット	青白土器、土師器、素盞、 中世土器等、東洋、墓石	11
3	新小町小長沢地内	調査	市教委	1,286	18	2020/6/25	個人住宅建設	なし	近代漆器	8
4	新小町小長沢地内	調査	市教委	2,480	26	2020/6/14～ 2020/11/13	新規土塁整備	中世漆・ビット	中世土器等、東洋、古鏡、 越中廻紋	8
5	新小町小長沢地内	調査	市教委	218	16	2021/6/15	個人住宅建設	なし	中世土器等	9
6	新小町御内地内	調査	市教委	60,700	354	2021/10/2～ 2021/11/17	新規土塁整備	青白磁、古代漆、武士漆	青白土器、土師器、瓦器、 刀・口刀部	9
7	新小町小長沢地内	調査	市教委	3,773	58	2022/7/13	鉄物貯蔵施設改修工事	青白漆・古代漆	青白土器、土師器、瓦器等	10

引用文献

- 富山県埋蔵文化財センター 2004『富山県埋蔵文化財センター年報－平成15年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2008『富山県埋蔵文化財センター年報－平成19年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2014『富山県埋蔵文化財センター年報－平成25年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2015『富山県埋蔵文化財センター年報－平成26年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2019『富山県埋蔵文化財センター年報－平成29年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2020『富山県埋蔵文化財センター年報－平成30年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2020『富山県埋蔵文化財センター年報－令和元年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2021『富山県埋蔵文化財センター年報－令和2年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2022『富山県埋蔵文化財センター年報－令和3年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2023『富山県埋蔵文化財センター年報－令和4年度－』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2021『富山市の遺跡物語』No.22

2 発掘作業の経過と方法

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡の調査区は、いずれも水田に伴う排水路幅のみの狭小である。隣接する水田は調査後に耕作を再開することから、掘削土と表土が混在しないようするために、重機による表土除去は調査区よりも広めに行なった。重機による表土除去後、水山床土や盛土などは重機でさらに掘削し、表土を除去した調査区隣接地に仮置きした。遺物包含層の掘削、造構の検出・掘削は人力で行い、掘削土は調査区隣接地に排出した。

記録図面は概略図（1：100または1：200）、造構断面図（1：20）、土層断面図（1：20）、遺物出土状況図（1：10）で、すべて調査員が手作業で作成した。記録写真は、土層や造構断面をコンパクトデジタルカメラ（OLYMPUS TOUGH TG-6）で、調査区の全景や造構のブロック写真を6×7フィルムカメラ（PENTAX 67Ⅱ カラー・白黒フィルム）とデジタル一眼レフカメラ（Nikon D 5600）で、調査員が撮影した。造構平面図は、下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡については日本海航測株式会社がラジコンヘリコプターによる空中写真測量（FUJIFILM GFX50S カメラ使用）で作成、小長沢鎌蓋遺跡については北陸航測株式会社がトータルステーション（Trimble SX12）による現地測量で作成した。測量終了後、重機で調査区の埋め戻しを行い、表土を戻し、現地調査は終了した。

第3表 調査一覧

遺跡	調査期間	調査面積 (m ²)	担当者	検出造構	出土遺物
下邑遺跡	20221007～20221031	158	島田亮仁 高柳由紀子	構・自然流路	土師器、須恵器、中世土師器、陶器、越中郷戸、肥前土師器、木製品
小長沢Ⅱ遺跡	20221027～20221126	281		構・落ち込み・小穴	縄文土器、弥生土器、土器器、灰陶、青磁、白磁、肥前土師器、木製品
小長沢鎌蓋遺跡	20230724～20230801	56	山中道子 町田貴一	自然流路	土師器、越中郷戸、肥前系陶器

第4表 調査の経過

	下邑遺跡	小長沢Ⅱ遺跡	小長沢鎌蓋遺跡
表土機械剥離	20221007	20221027	20230724
盛土機械剥離	20221011	20221028～20221101	20230725
造構検出・人力掘削	20221013～20221020	20221102～20221116	20230725～20230726
全景写真撮影	20221021	20221118	20230726
空中写真・現地測量	20221021	20221118	20230726
埋め戻し	20221025～20221031	20221125～20221128	20230731～20230801

3 整理作業の経過と方法

記録図面や記録写真の整理は発掘調査終了後、調査員が早急に行い、造構や写真などの台帳作成も行った。出土遺物は調査員が洗浄、注記、選別を行った。木製品については、調査員が計測とデジタルカメラによる写真撮影後、台帳を作成した。遺物の実測は、調査員が手実測で行った。遺物のトレスは、調査員が Adobe Illustrator CS6 を用いて行った。

第5表 調査・整理体制

	統括	統括	担当
令和4年度	振扱 島田美佐子	麻生幹 越前慎子	麻生幹 島田亮仁 高柳由紀子
令和5年度	振扱 町田道子		麻生幹 町田賢一

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、県庁所在地で富山県中央部にある富山市に所在する。現富山市は「平成の大合併」で、平成 17(2005)年 4月 1日に旧富山市・上新川郡大沢野町・上新川郡大山町・婦負郡八尾町・婦負郡婦中町・婦負郡山川村・婦負郡細入村の 1市 4町 2村が合併したもので、面積 1,241.77 km²と富山県の約 1/3 を占める県内最大の都市である。下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、富山市の西部にあたる旧婦中町小長沢に位置する。旧婦中町は神通川・井山川流域の扇状地と奥羽丘陵南部や羽根丘陵の丘陵地からなる水山地帯であったが、旧富山市街に近いことからそのベットタウンとして発展し、合併前の旧町村では最も人口の多い地域でもあった。

小長沢は元々石田と呼ばれ、長沢川（現、山田川）の小石河原を開拓してその名がついたという。古代では婦負郡小字郷にあったとされる。近世には富山藩領婦負郡長沢郷小長沢村となり、近代には古里村の一部となっている。現在の集落はふるさと農道沿いにまとまってある。また、羽根丘陵中腹部（小字大山）には、村社で仁徳天皇を祭神とする若宮八幡社がある。若宮八幡社は文化 2(1805)年に熊野社を合祀し、元治元(1864)年に本殿を造営したとされ、令和 4(2022)年に改築された。

下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡は、富山市と南砺市にまたがる金剛堂山から井山川へと流れ込む山田川と、奥羽丘陵南側の羽根丘陵とにはさまれた沖積平野にある。現況面の標高は、北にある小長沢Ⅱ遺跡で 17m 前後、小長沢鎌蓋遺跡で 18m 前後、南にある下邑遺跡で 20m 前後となっている。『地形分類図 八尾』では低地－新扇状地、『表層地質図 八尾』では未固結堆積物－泥、『土じょう図 八尾』ではグライ台地土壤－滝川統にあたる。現況は、これらの地質を反映した粘土質の土壤を耕作土とし、良質な米が収穫される水田地帯である。

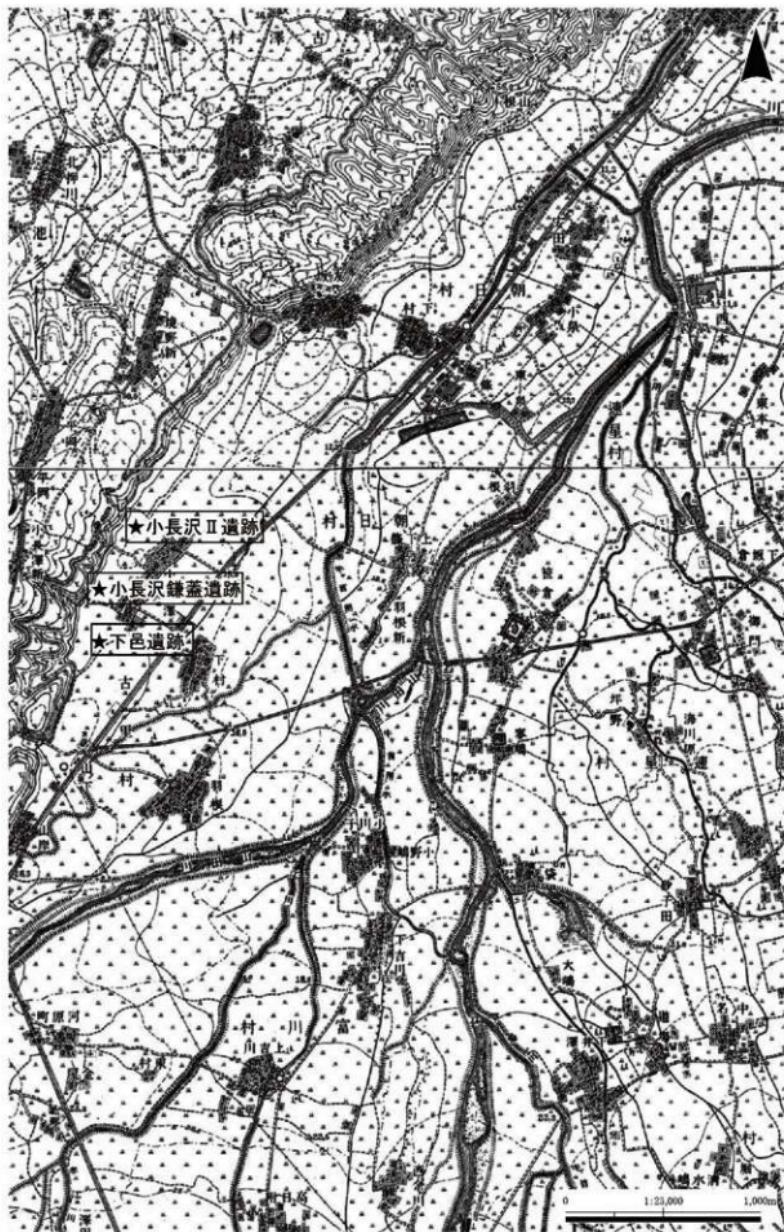
現在、遺跡周辺は平坦な水田が広がるが、明治 43(1910)年測図の第 2 図をみてみると、南西から北東方向に向かって下る同心円状の等高線がある。これはかつてこの一帯が南方の山地から流れる山田川による扇状地であったことを示している。さらに昭和 21(1946)年米軍撮影の第 3 図をみてみると水田の区画が湾曲している部分があり、土地改良前には流路がいくつかあったと考えられる。



写真 1 小長沢地区村社 若宮八幡社



写真 2 1966 年建立土地改良記念碑



第2図 下邑遺跡、小長沢II遺跡、小長沢鎌蓋遺跡 遺跡位置図(1:25,000)

※国土地理院(明治43年測図・大正7年発行『二万五千分一地形図 高山・大久保』から作成)



第3図 下邑遺跡、小長沢II遺跡、小長沢鎌蓋遺跡 米軍写真（1946年撮影）合成図
(国土地理院 USA-M203-A-123 使用)

2 歴史的環境

下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡・小長沢鎌蓋遺跡の周辺では、沖積平野部分には少ないものの、西側の呉羽丘陵・境野新扇状地扇頂部・射水丘陵・羽根丘陵を中心に旧石器時代から近世まで数多くの遺跡がある。発掘調査を行った主な遺跡を時代順に見てみると、旧石器時代では呉羽丘陵の杉谷H遺跡、扇状地扇頂部の境野新遺跡や北押川・墓ノ段遺跡、羽根丘陵の千坊山遺跡や鏡坂Ⅰ遺跡、射水丘陵の草山B遺跡や開ヶ丘・狐谷Ⅲ遺跡などでナイフ形石器が出土しており、県内では数少ない旧石器が、複数の遺跡でみつかる地域となっている。とくに草山B遺跡ではユニットが2か所あり、集落の様相を示している（狩野他 1986）。このほかに向野池遺跡では瀬戸内技法による剥片、北押川B遺跡では東山系や杉久保系のナイフ形石器が出土しており、広域交流がうかがえる資料がみついている。

縄文時代では丘陵地を中心多くの遺跡がある。草創期では土器はみつかっていないが、新町Ⅱ遺跡や千坊山遺跡で槍先形尖頭器が出土している。なお、報告書（折原編 2006）によれば向野池遺跡で草創期から早期の竪穴建物から土器片がまとまって出土しているという。前期になると平岡遺跡や北押川C遺跡で土器から時期比定ができる竪穴建物がみつかるようになる。とくに平岡遺跡では環状に配置された竪穴建物群（居住域）、環状内に掘立柱建物・土坑墓・埋設土器（墓域）がみつかり、県内では最も古い“環状集落”が形成されている。中期では鏡坂Ⅰ遺跡、上堤池遺跡、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡など複数の遺跡で竪穴建物がみつかっている。なかでも開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡はほぼ全域を発掘調査し、北側に中期前葉、南側に中期中葉と二つの“環状集落”を確認した県内でも唯一の縄文集落である（平岡編 2009）。晩期では古沢A遺跡や北野遺跡で住居もしくは祭祀施設とされる大型の柱穴列が検出されている。このほかに古沢遺跡で貯蔵穴、古沢B遺跡で赤彩装身具などを入れた単独の土坑墓がみつかっているなど呉羽丘陵南部と射水丘陵北部に遺跡がみられる。

弥生時代になると居住域は鍛冶町遺跡や富崎遺跡などの沖積平野、墓域は杉谷A遺跡・杉谷4号墳や六治古塚墳墓などの丘陵部というように分化することが多い。ただし、羽根丘陵の千坊山遺跡、さらには富崎赤坂遺跡など高所からも竪穴建物がみつかっており多様なあり方もある。これらは古墳時代に続く玉堀・千坊山遺跡群の一つであり、勤使塚古墳など大型の古墳を造営するような勢力の存在を示しているのだろう。また、呉羽丘陵南部にも杉谷1番塚古墳や古沢塚山古墳などの古墳があり、この地域は弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺跡が集中するのも特徴的である。古墳時代後期になると二本榎遺跡で県内では珍しい横穴式石室をもつ円墳がみつかっている（藤田 2012）。

古代では沖積平野の鍛冶町遺跡、呉羽丘陵の古沢遺跡、扇状地扇頂部の北押川B遺跡、羽根丘陵の各廟寺前遺跡、射水丘陵の開ヶ丘中遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物からなる集落が複数みつかっている。なお、北押川B遺跡や開ヶ丘中遺跡では製鉄炉や土師器焼成構造など生産域もあり、居住域だけでなく多様な侧面をもっている。さらにこれまで遺跡はないとみられていた扇央部に瓦陶兼業窯を2基と柘谷南遺跡がみつかり、当地域において8世紀以降に大きな開発が行われたことが想像される（鹿島編 2002）。また、境野新南Ⅲ遺跡や野下・新開遺跡など扇頂部や丘陵部にある遺跡の多くで焼壁土坑が検出されるのも当地域の特色である（島山 2016）。

中世になると沖積平野では友坂遺跡、丘陵部では千坊山遺跡などで堀を巡らす居館が出現する。とくに友坂遺跡は12世紀から16世紀と長期間遺跡が存続する拠点である（常深編 2020）。山田川と井田川の合流点に近く、交通の要所であり、丘陵の裾部から続く安定した平地であり、居館を築くにはこの上ない選地だったのだろう。



第4図 周辺の遺跡 (1 : 25,000)

第6表 周辺の遺跡一覧

立地	遺跡名	印石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	文献
井田川左岸沖積地	友飯遺跡	○	○	○	●	●	○	○	脇野他 1984、岡本他 1993、片岡他 1997、辻辻 2014、雪報編 2020
	小長沢Ⅱ遺跡	○	○	○	●	●	●	●	本書
	小長沢謙齋遺跡		○		●	●	●	●	本書
	下邑遺跡	○				●	●	●	本書
	鏡治町遺跡		●	●	●	●	●	○	辻辻編 2003、辻辻他 2007
	富崎遺跡		●	○	○	●	●	○	岡山編 2006、鈴谷編 2008
	南部Ⅰ遺跡		●	●	●	●	●	○	堀内 1998・2000、大野 2003、堀内編 2014
鳥羽丘陵	古河遺跡	○	●			●			藤田 1975、小島 1977、藤田編 1985
	古河A遺跡	○	●	○	●	○			藤田 1982、藤田編 1983
	古河B遺跡		●						藤田 1982、藤田編 1983
	古沢御山古墳				●				藤山 1976
	金河跡の火櫓火薙群				●				藤田 1976
	杉谷 64号墓跡	●							藤田 1973
	杉谷A遺跡		●	●	○				藤山 1975
	杉谷B鹿跡	○	○			●			藤田 1975
	杉谷1番塚古墳			○	●				藤田 1974、高橋編 2020・2021
	杉谷4号墳		●	○					藤田 1974、高橋編 2014～2017・2019
	猪野新扇状地帯火葬		○			●		○	鹿島編 1999・2002
	猪野新窪跡	○	○		●	○		○	藤田編 1974、鹿島 2000
	内野遺跡	●	●	●		●	○	○	鹿島 2000、近藤 2000・2001、藤田編 2002、折原編 2006
	尾野新南三造跡	○				●			野垣 2017
	北津川・森ノ段遺跡	○	●			●	○		藤田 1973、吉川 2013・2014
	北津川B遺跡	○	○			●	○	○	新宅編 2008、日暮編 2009
	北津川C遺跡		●			●			福山編 2003、吉田編 2008、日暮編 2009
剣根丘陵	御坊山遺跡	○			●			○	古川 2000・2002、吉田編 2008
	野下・新開遺跡	○	○		●				吉川 1985、山上他 1985、鳥山 2016
	平岡遺跡	○	●		●				余工序編 2015
	二木坂遺跡	○		●	○				藤田編 2012・2015
	小長沢Ⅰ遺跡	○			○	●			堀内 1997
	新町Ⅱ遺跡	○			●	●	○		山上他 1985、片岡編 1986
	各脇寺前遺跡	○			●	●	○		片岡編 1994、辻辻編 2004
	勤使塚古墳				●				串川 2003
	千坊山遺跡	○	○	●	○	●	○	○	片岡 1995・1996・1998
	六沢古塚群			●		○	○	○	大野 2002
	鏡坂Ⅰ遺跡	○	●			○	○		有山他 2000
	外輪I遺跡	○	○		○	●	○	○	片岡他 1997、有山他 2000
針木丘陵	富崎塚古墳群	○	●		○	○	○	○	大野 2002
	南所赤坂遺跡			●					大野 2002
	草山B遺跡	●				○			脇野他 1986
	桜土遺跡	○	○			●			関他 1987、池野他 1988
	北鮮遺跡	○	●		●	○			関他 1987
	上坂流遺跡		●			○	○	○	藤田 1973
	因ヶ丘中山田遺跡		●			○			近藤編 2002、小原編 2003
	因ヶ丘糸谷Ⅲ遺跡	○	●		○				小原他 2003、小原・飯野編 2003、近藤他 2003・2004、平岡編 2004
因ヶ丘	因ヶ丘ヤシキ下遺跡	○				●			小原他 2003
	因ヶ丘中遷跡	○	○			●			近藤他 2003、近藤編 2002
	因ヶ丘中山IV遺跡	○	○			●			近藤編 2001・2002、小野・飯野編 2003
	因ヶ丘糸谷遺跡	○				●			吉川 1986、近藤他 2002

第三章 下邑遺跡

1 概要 (第5図、図版1・2)

下邑遺跡は、富山市教育委員会によって平成30（2018）年度から令和3（2021）年度まで行われたま場整備事業に伴う試掘調査の結果、それまでの一つの広大な遺跡範囲から遺構・遺物がみつかった部分のみに縮小された。新たな遺跡範囲は、婦中町小長沢地内に4か所、婦中町下邑地内に1か所の計5か所からなる。遺跡の時期は、縄文時代、古代、中世、近世である。

令和4（2022）年度の調査地は、5か所に分割された遺跡範囲のなかで一番北西（小長沢字鎌蓋）にあたる。その中央で、南西から北東に走るM-5号排水路部分にあたる。調査区は排水路部分のため、幅約3.2m、長さ約46m、面積158m²と細長くなっている。遺跡の現況は水田で、転作でムギを植栽している。標高は19mである。検出した遺構は、自然流路と溝。出土遺物は土師器11、須恵器7、中世土師器1、珠洲3、越中瀬戸3、肥前系陶磁器1の計26点（551.84g）と木製品1点である。

2 層序 (第8図)

基本層序はⅠ層とⅡ層の大きく2層に分けられる。Ⅰ層は表土で、黒褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物包含層は確認されず、Ⅱ層は灰色粘土で地山となる。遺構検出はⅡ層直上で実施し、自然流路（NR1）と溝（SD2）を確認した。小長沢Ⅱ遺跡と同様に、調査区の壁面や検出面からは水が湧き出るような低湿地環境である。

3 遺構 (第6～9図、図版3・4、第7表)

検出した遺構は、自然流路（NR1）と溝（SD2）のそれぞれ一つずつである。

（1）自然流路

1号自然流路（NR1、第5・7～9図、図版3・4）

調査区の南側で検出した。北側（左岸）の肩部は確認したが、南側（右岸）は調査区外となるため、自然流路の幅は不明である。深さは検出面（Ⅲ層）から約0.5mで、南側へ緩やかに傾斜している。周辺地形から羽根丘陵に沿うように流れていると考えられる。埋土は上位に暗オリーブ灰色礫砂が堆積し、下位はシルト質粘土に未分解の植物遺体が含まれる。遺物はビート層からの出土は確認されなかつたが、砂礫～礫砂層からは摩耗した須恵器や珠洲が出土している。自然流路の埋没時期は上位の砂礫～礫砂で少なくとも中世以降と考えられ、古代から中世には流れていたのだろう。

埋土の2層と3層から須恵器、珠洲が出土している。特に2層の下位と5層の上位から出土している。5層の砂礫は、調査後重機で下層確認に深掘りし、底辺を確認している。堆積物や層位などから、比較的大きな自然流路で、時代によって流路が移動したり、堆積と浸食を繰り返している可能性がある。調査区外は更に深いと思われる。なお、5層の底辺は地山の灰色粘土であったので、5層より深くなることはない。南側の7層はビート層と砂層の互層であり、流路の埋土の可能性があるものの、

重機で山面から約1.5mの深度で崩落の危険があったため、それ以上は安全上、掘削是不可能であり、地山は確認できなかった。

出土遺物には古代の土師器11、古代の須恵器6、中世土師器1、珠洲3点がある。1は土師器の杯。摩滅が激しく、調整はわからない。2~6は須恵器。2は壺の胴部か。外面に自然軸がかかる。3・4は壺の胴部とみられ、外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。4の外面のタタキはナナメの後ヨコ。5・6は壺の口縁部。5は口縁端部を欠損し、復元している。6は摩滅が激しい。7は中世土師器皿。摩滅が激しく、調整はわからない。8~10は珠洲。いずれも壺とみられ、外面にタタキ、内面に当て具痕が残る。9は一辺を意図的に打ち欠いたような剥離がみえる。10は口縁部を欠ぐが、復元すると口径52cmになる。吉岡編年でIV期か。以上のように遺物の時期は、古代から中世まであるものの、いずれも小破片で摩滅が激しいものが多く、原位置を保っていない可能性が高い。

(2) 溝

2号溝 (SD2、第5・6・8・9図、図版3・4)

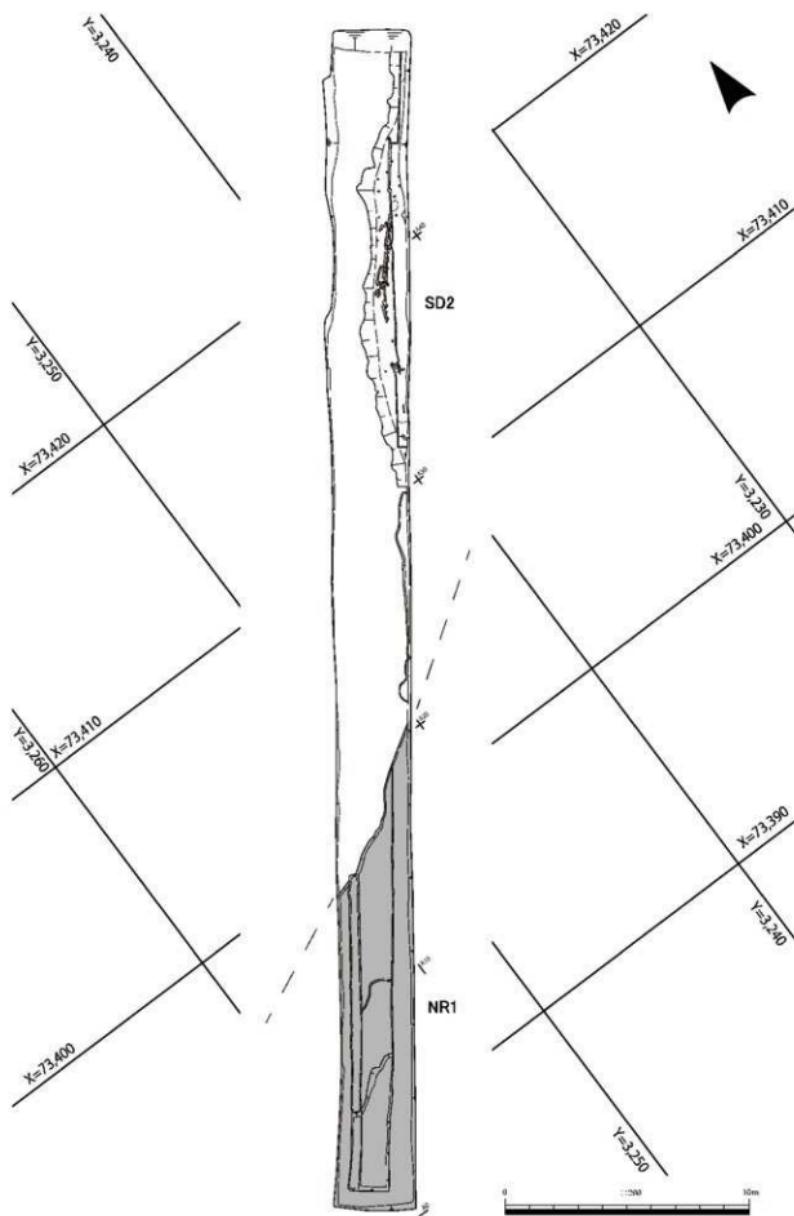
昭和31(1956)~34(1959)年の土地改良事業区画整理前の水路と思われる。丸木の杭や壁面保護の板材や木材(未加工)などが出土している。現代の遺物は出土していないが、杭の先端の加工は近・現代風であった。狭小な調査区のため、安全上の理由から完掘はしておらず、断面で深さを確認し、その後は全体を10~20cm程度掘削して、範囲を明確にして調査終了とした。近代以降の所産か。出土遺物には須恵器1、越中瀬戸1、肥前系陶磁器1がある。11は須恵器の杯蓋。生焼けで外面は褐色を呈する。12は越中瀬戸で火入れか。内外面鉄釉。13は肥前系陶磁器で伊万里の猪口か。外面に染付がある。

4 遺物 (第9図、図版4、第8・9表)

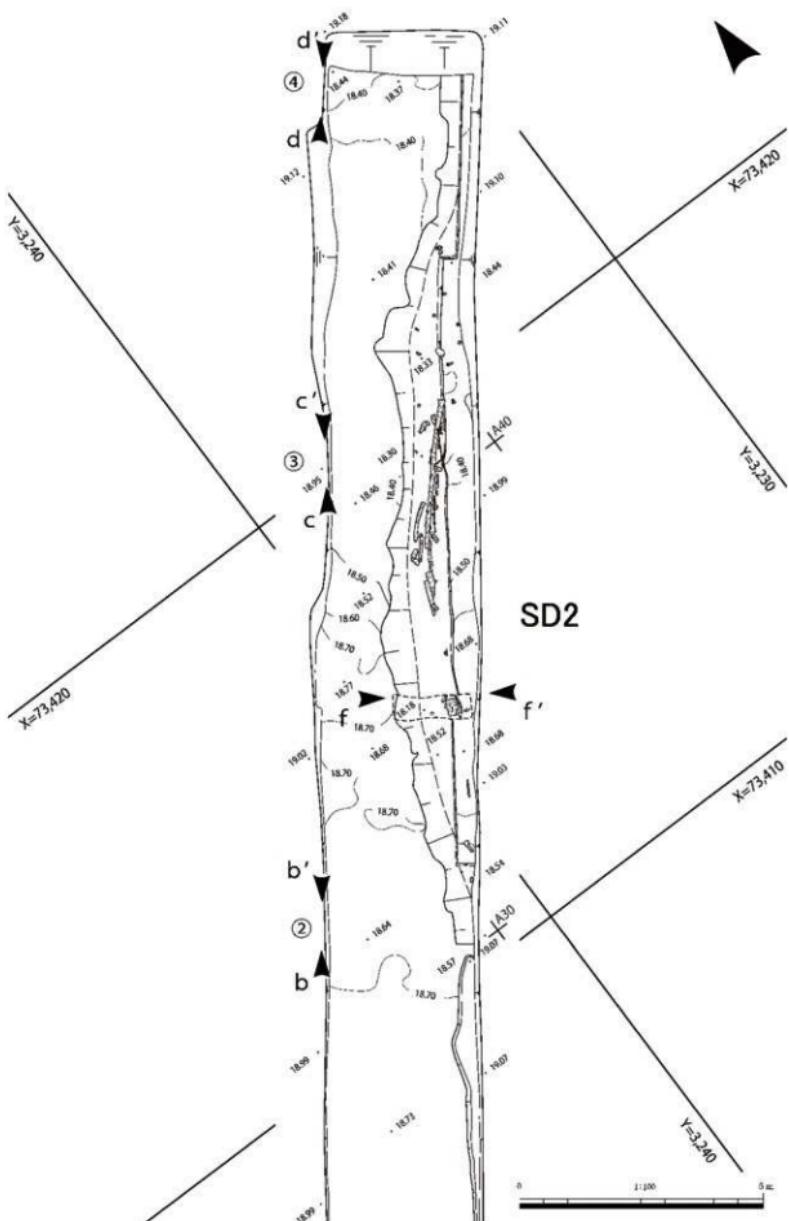
遺構外からは、越中瀬戸2点と木製品1点が出土している。14・15は越中瀬戸。14は火入れ。口縁部を欠損し、復元した。外面に鉄釉をかける。15は皿の底部。見込みを除き鉄釉がかかる。底面を欠損。16は木製品で曲物の側板とみられる。上下に分割しているが、縦方向にケビキとみられる4本の沈線が入る。

5 小括

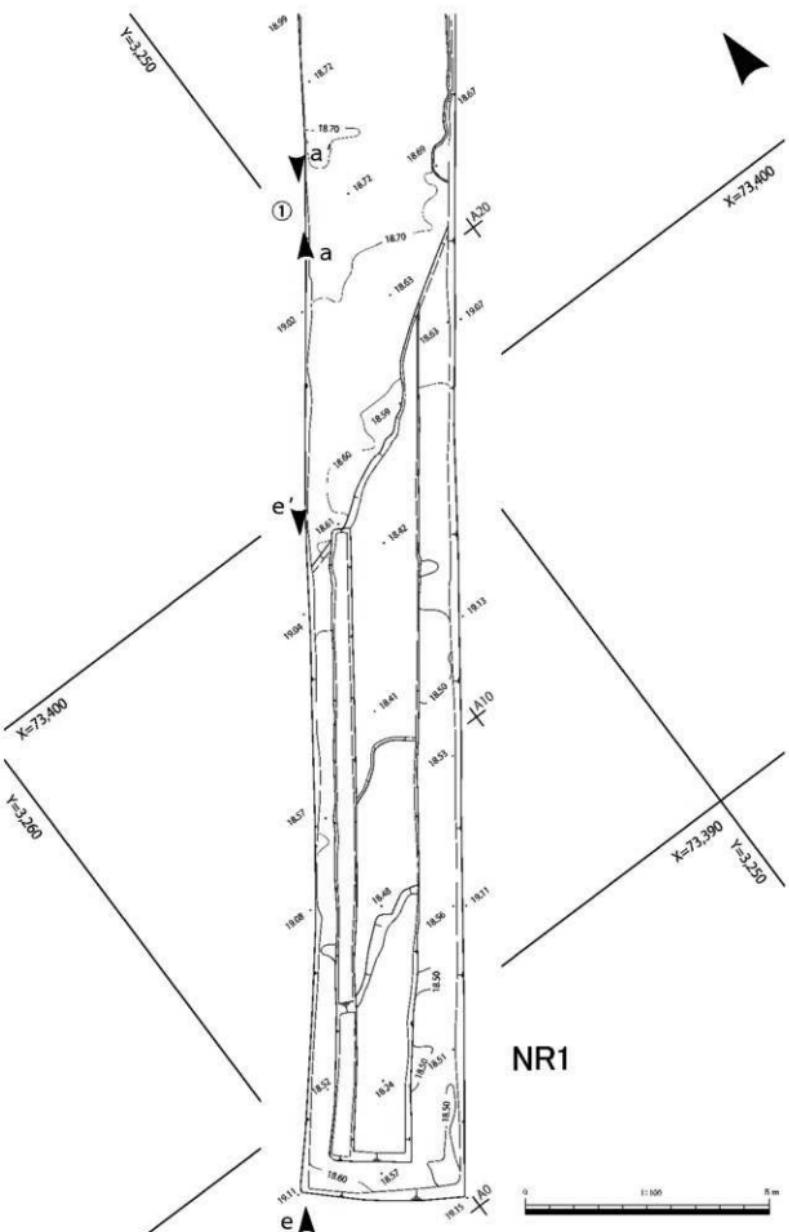
造構は古代以降の自然流路と近代以降の溝のみで、出土遺物は摩耗が激しく、良好なものはない。小長沢II遺跡(第IV章6)と小長沢縁蓋遺跡(第V章6)の自然科学分析の結果とあわせると湿地環境が想定され。NR1は山田川の支流であった可能性が高い。SD2は水田に伴う水路であったのであろう。今回の調査結果と遺跡範囲が5か所に分割されていることなどから、南方にある山川によって形成された扇状地で、流路を変えて島状に残った部分に遺跡が残存していることを示すのだろう。



第5図 下邑遺跡 造構全体図 (1 : 200)

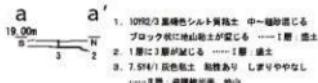


第6図 下邑遺跡 造構平面図1 (1 : 100)

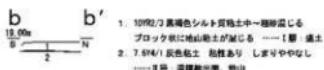


第7図 下邑遺跡 遺構平面図2 (1 : 100)

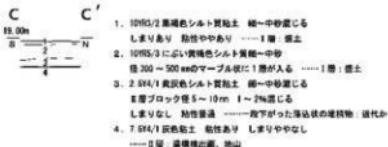
基本層序①



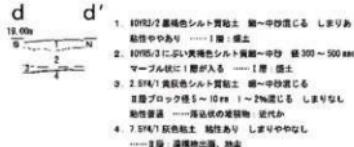
基本層序②



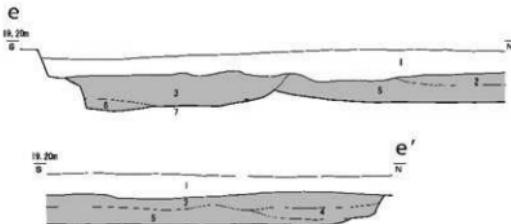
基本層序③



基本層序④

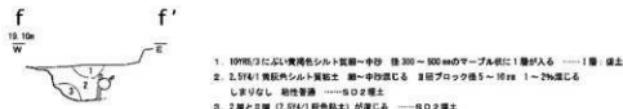


N R 1



1. 10B2/2 黄褐色シルト質粘土 中～中砂混じる ブロック状に3層砂土が盛り込む ……1層：底土
2. 7.5M4/1 黄色 線～中砂 5～50mm円錐混じる (深層由来か) 地山ブロック盛り込む しまりやわなし 粘性やわらか ……NR 1 粘土
3. 2.5M4/1 黑色シルト質粘土 粘性高め やや有機質 密度やわらか しまりなし 粘性あり ……NR 1 粘土
4. 2.5M4/1 細オーリーブ色砂岩 砂は粗粒～細粒 厚さ約 2～3mm 沈没良好 やや2層が上部ほど入る ……NR 1 粘土
5. 2.5M4/1 細オーリーブ色砂岩 砂は粗粒 2～10mmを中心 10mm～50mm円錐混じる 特に粗粒～細粒 沈没良好 ……NR 1 粘土
6. 1層に1層が盛り込むがやや粘性あり ……NR 1 粘土
7. 2.5M2/2 黄褐色シルト質粘土 有機質高 (やや水分多) 線～中砂シルトとの互層 ……NR 1 粘土

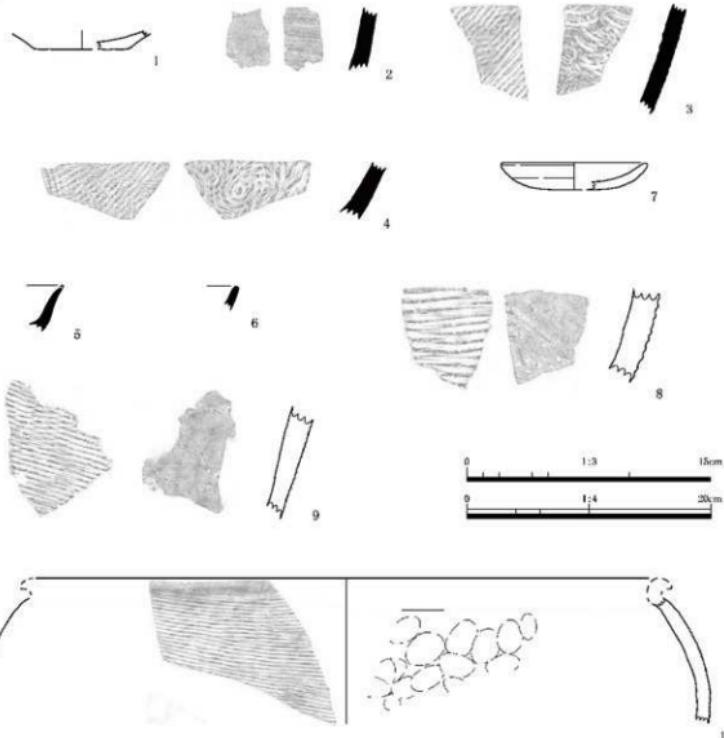
S D 2



第8図 下邑遺跡 基本層序・縦横断面図 (1 : 40)

基本層序 NR 1 S D 2

NR 1



第9図 下呂遺跡 遺物実測図 (1~9・11~16 1:3, 10 1:4)

NR 1 (1~10) SD 2 (11~13) 造構外 (14~16)

第IV章 小長沢Ⅱ遺跡

1 概要 (第10図、図版1・6)

小長沢Ⅱ遺跡は、富山市教育委員会によって令和元（2019）年度から令和3（2021）年度まで行われたは揚整備事業に伴う試掘調査の結果、それまでの一つの広大な遺跡範囲から遺構・遺物がみつかった部分を遺跡範囲とし、さらに南西側を小長沢鎌蓋遺跡として分割している。遺跡の時期は、縄文時代、古代、中世、近世である。

令和4（2022）年度調査は新たな遺跡範囲の北東部で、北東－南西方向のM-3号排水路建設部分にあたり、小長沢字狭間。排水路部分の調査のため、幅約3.6m、長さ約83mとトレンチ状の細長い調査区である。調査面積は281m²。標高は約18～19mで、調査前の現況は農道である。調査区の隣接地は水田であり、耕面や検出面、暗渠からは水が湧き出るような低湿地環境である。試掘調査では検出面の多くが、現耕作土もしくは客土直下である。出土遺物には縄文土器1、弥生土器2、土師器51、珠洲1、青磁1、白磁1、肥前系陶磁器1の計58点（791.23g）と木製品4点がある。

2 層序 (第16図)

基本層序はI層からIII層の大きく3層に分けられる。I層は灰黄褐色粘土質砂で、盛土もしくは客土である。II層は粘性の高い黒褐色粘土質砂で、遺物包含層とみられる層である。遺構の埋土の多くもII層に近似した堆積物である。III層は灰色粘土で地山であり、粘性が著しく高い。

3 遺構 (第10～16図、図版7～9、第10表)

遺構検出は地山であるIII層の直上で実施し、溝7、落ち込み6、小穴を確認した。遺構は主に西側に展開しており、東側はほとんど確認されなかった。明確な溝は7条あり、調査区を南西－北東方向に走るものが多い。

（1）溝

2号溝（SD2、第10・11・16・18図、図版7・12）

底辺には溝状の幅の狭い（0.8m前後）落ち込みが3条併走している。特に真ん巾と南東端の2条は明瞭である。作り替えや、掘り直しを想定したが、切り合いや明確な埋土の違いは確認されなかった。全般に埋土が砂主体なので、一定の流水があったと推定される。埋土4層から曲物底板（28）が出土している。28は曲物底板で半分を欠損する。この他に固化していない土師器4点（23.78g）が出土している。出土遺物から古代以降の溝と考えられる。

3号溝（SD3、第10・11・16図、図版8）

SD2の東隣に走る浅い溝。出土遺物はない。所属時期は不明。

4号溝（SD4、第10・11・16・17図、図版8・10）

SD5の西隣に並走する、比較的深みのある溝。出土遺物には弥生土器1、土師器7の計8点（40.01g）がある。遺構の時期は不明である。17は弥生土器蓋の底部。摩滅が激しく、調整はわからないが、黒斑が残る。

5号溝（SD5、第10・12・16図、図版8）

SD4の東隣に並走する溝。SD4と比較して深い。出土遺物はない。遺構の時期は不明である。

6号溝（SD6、第10・12・15～18図、図版8～12）

SD5の東隣に位置する溝。SD4やSD5と比較して規模が大きい溝。埋土5・6層は有機物を含む黒色粘土が主体であるが、3層は砂が主体で、流水があった可能性が高い。植物遺体が含まれており、断面にはオーバーハングしていることが確認される。なお、遺物の時期が複数あることから埋土土壤のAMS年代測定と花粉分析を行った。結果、古代からの堆積とみられる。

出土遺物には土師器8、肥前系陶磁器1の計9点（103.88g）と木製品2点がある。肥前系で唐津の擂鉢（19）は埋土上位から出土しており、混入の可能性がある。18は土師器の甕。古墳時代のくの字状口縁か。内外面ハケメ調整。19は唐津の擂鉢。口縁部のみで鉄軸がかかる。復元すると口径28cmとなる。29・30は木製品。29は曲物底板で完形。側板をとめるための木釘穴が6か所あり、5か所で木釘が出っ張って残る。30は断面長方形の棒状。上部に抉りのような切込みがある。上下端を欠損。

7号溝（SD7、第10・12・16・17図、図版9・10）

SD5の東隣に位置する溝。SX11を切る。掘方は比較的明瞭であるが、埋土は砂が主体で、10～20cmの礫が全体に混じり込む。出土遺物には青磁1点（3.66g）がある。遺構の時期は埋土が他のSD2やSD6とは明らかに異なることからより新しい（近世以降？）と考えられる。20は中国製青磁の皿。口縁部のみ、同安窯系とみられ、12世紀か。

8号溝（SD8、第10・12・16図、図版9）

溝としたが、SX11と同一で、新しい可能性（近現代）もある。出土遺物には、図示していないが土師器8点（22.58g）がある。

（2）落ち込み

1号落ち込み（SX1、第10・11図、図版7）

いわゆる漸移層的な埋土（オリーブ黒色砂）。遺物はなく、ヨシやアシなどの単子葉類の茎などが混じる。遺物は出土していない。

9号落ち込み（SX9、第10・11・17図、図版9・10）

著しく浅い。埋土は一様ではなく、II層がマーブル状に入る。出土遺物には弥生土器1点（21.54g）がある。21は弥生土器。摩滅が激しいが、外面タテハケ、内面ヨコハケ。

10号落ち込み（SX10、第10～12図）

著しく浅い。埋土は一様ではなく、II層がマーブル状に入る。出土遺物には、図示していないが土師器1点（5.19g）がある。

11号落ち込み (S X11、第 10・12・15・17・18 図、図版 10・12)

著しく浅い。他の S X10 や S X12 と比較して、埋土が異なる。砂粒を含むことから、比較的新しいと思われる。II 層がマーブル状に入る。出土遺物には土師器 5 点 (72.93 g) と木製品 1 点がある。22 は土師器碗。摩滅が激しいが、底面回転糸切りのち高台を貼り付ける。内面は渦巻き状のロクロナデ。31 は木製品。断面不整円形で、上下を欠損。中央を下方から抉りこむ。欠損部にも同様な抉り込みを連続でしていた可能性もある。

12号落ち込み (S X12、第 10・13 図)

著しく浅い。埋土は一様ではなく、II 层がマーブル状に入る。平面図では S X13 に切られているが、ほとんど違いはない。出土遺物には、図示していないが土師器片 3 点 (22.07 g) がある。

13号落ち込み (S X13、第 10・13 図、図版 9)

著しく浅い。埋土は一様ではなく、II 层がマーブル状に入る。平面図では S X12 を切っているが、ほとんど違いはない。出土遺物には、図示していないが土師器 5 点 (100.14 g) がある。

(3) 小穴

小穴群 (第 12 図)

小型で埋土にしまりのない穴。遺構番号はつけていない。深さは 10cm 程度で不整形。SD 4 ~ SD 5 の間にまとまってみられる。柱穴の可能性もあるが、規則性はない。SD 4 と SD 5 の時期から古代以降か。遺物は出土していない。

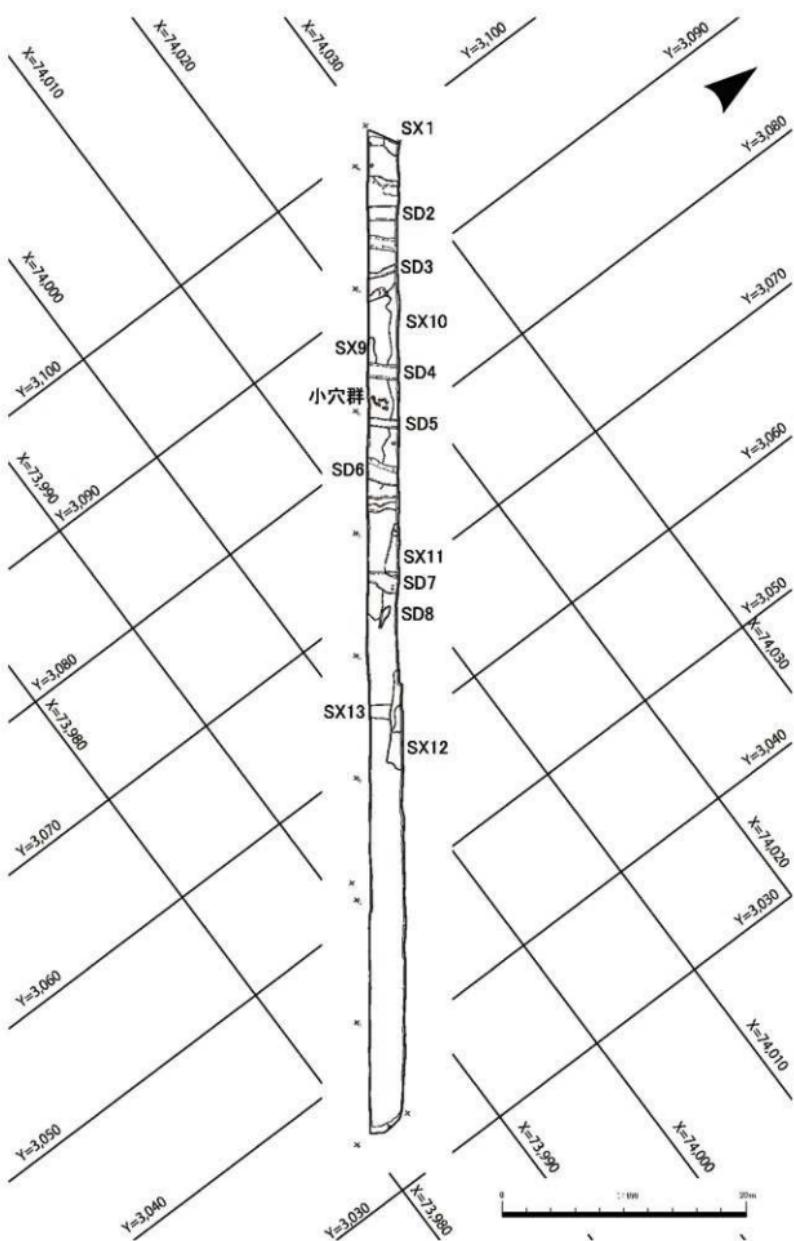
4 遺物 (第 17 図、図版 10~12、第 11・12 表)

遺構外からは縄文土器 1、土師器 15、珠洲 1、白磁 1 の計 18 点 (322.92 g) が出土している。23 は縄文土器の口縁部。摩滅が激しく、斜行縄文とみられるが詳細は不明。24・25 は古墳時代の土師器。24 は土師器壺の口縁部。摩滅が激しく、調整不明瞭。くの字状口縁か。25 は高杯もしくは器台の脚部。外面タテハケか。26 は白磁碗。口縁部を欠損。復元すると玉縁状の口縁部をもつ太宰府分類の IV 類か。27 は珠洲の擂鉢。内面に 10 本程度を 1 単位とする御目が入る。外面はヨコナデで指紋が残る。底面は糸切痕が残る。

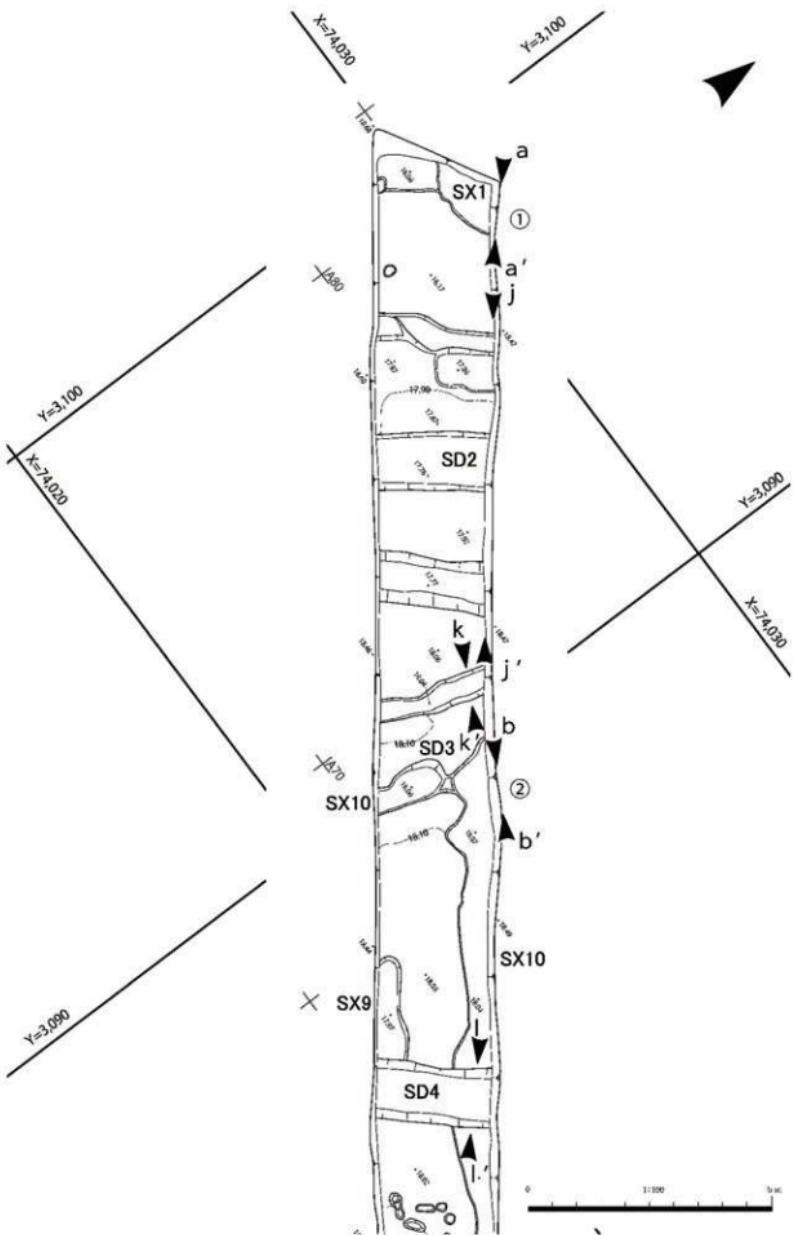
5 小括

調査区全体で遺構がみつかった。遺構の多くは南西ー北東方向の溝で建物などの居住痕跡が見られず、出土遺物も少ないとから集落域からは離れているか、その端にあたると考えられる。SD 6 の埋土土壤花粉分析からは湿地性堆積が想定され、SX 1 の植物が混じる埋土と合致する。また、SD 6 の埋土 AMS 測定からは弥生時代後期から古墳時代前期の年代値が得られた。しかし、小長沢鎌塗遺跡の花粉分析結果とあわせて考えると、その年代は古代である可能性が高い。つまり、今回の調査区においては古代までは湿地堆積で、中世以降は水田がつくられ、SD 7 などはそれに関わる水路と考えられる。このように山田川による氾濫原で島状に残った一部で集落が作られ、今回の調査区はその端にあたると考えられる。

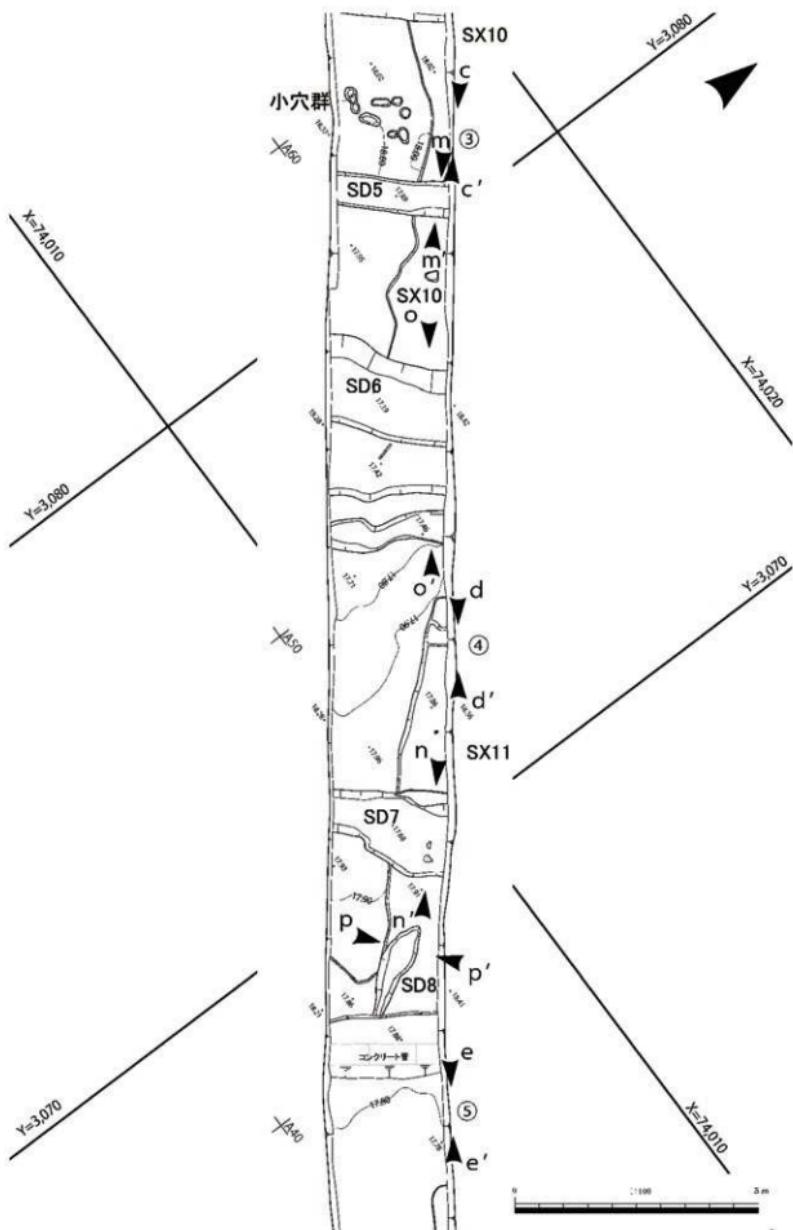
(町田賢一)



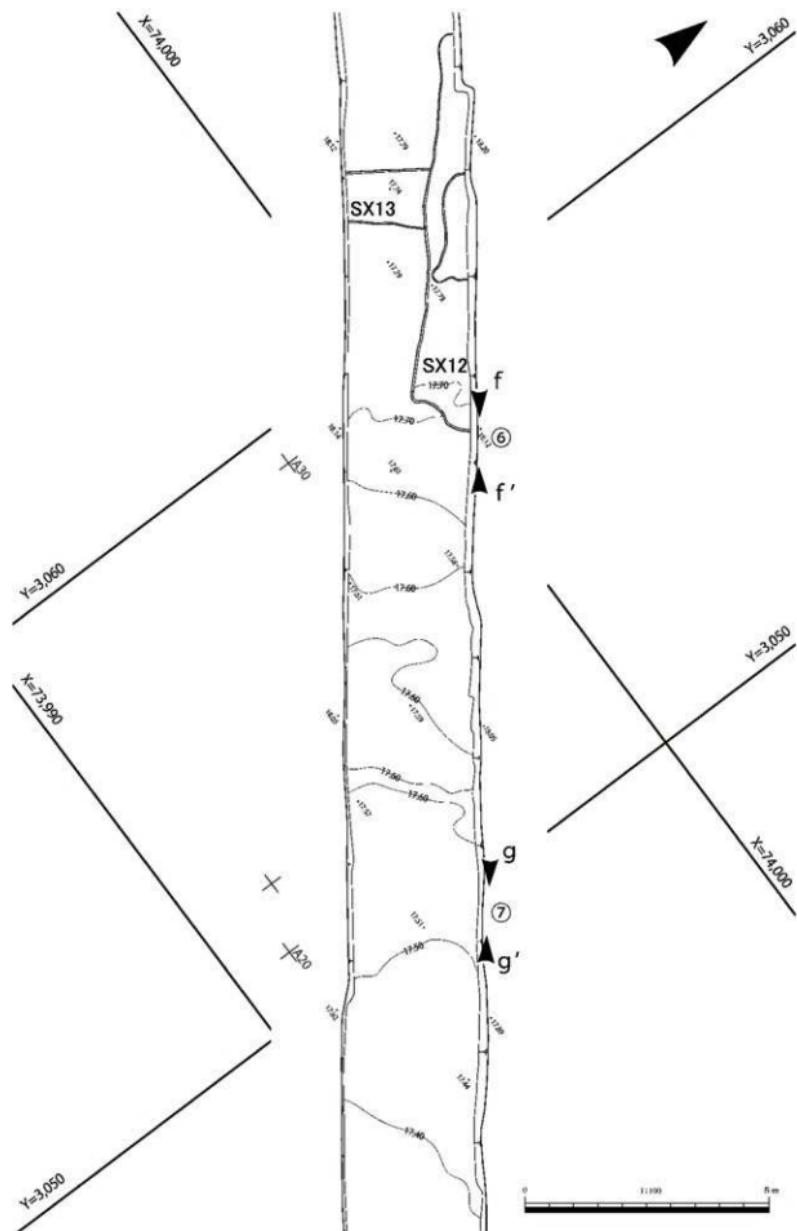
第10図 小長沢Ⅱ遺跡 造構全体図 (1 : 400)



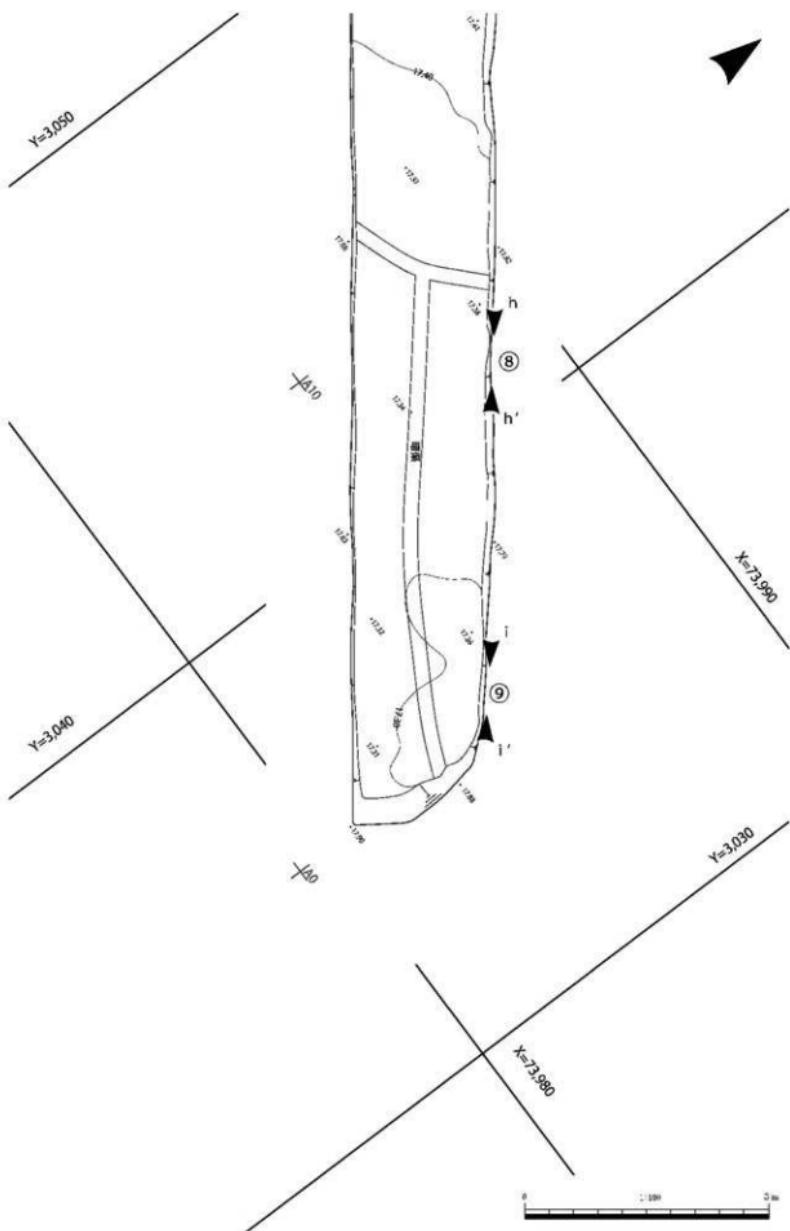
第11図 小長沢II遺跡 造構平面図1 (1 : 100)



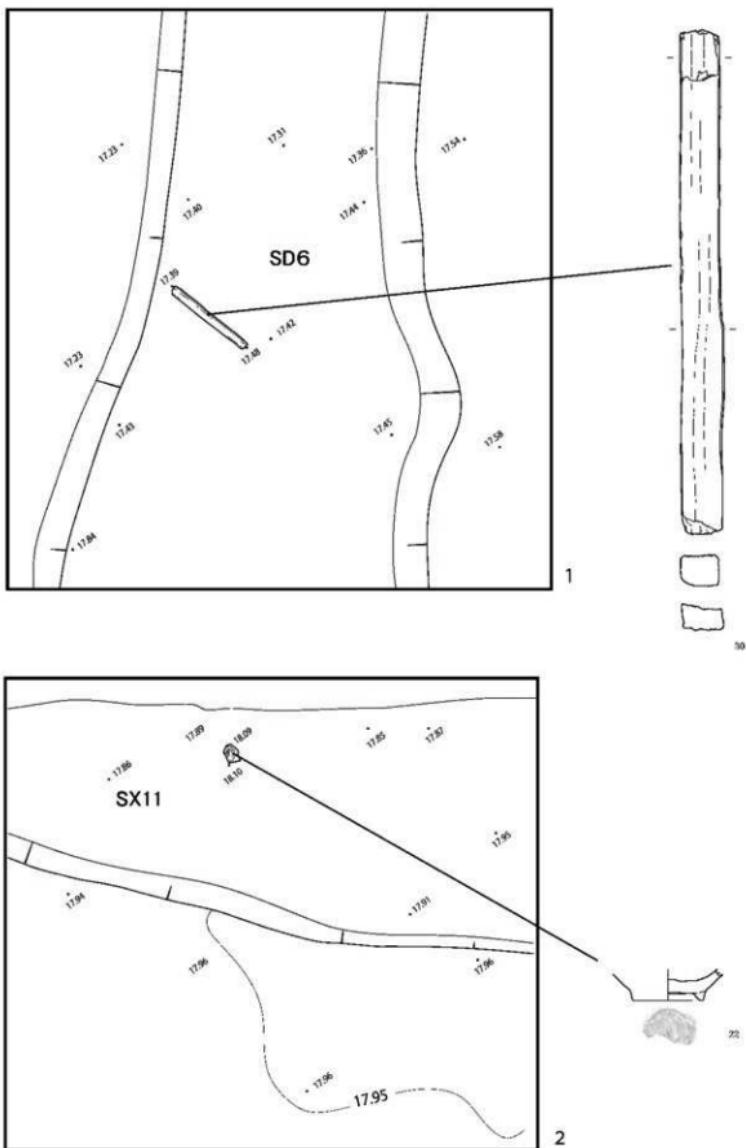
第12図 小長沢Ⅱ遺跡 遺構平面図2 (1 : 100)



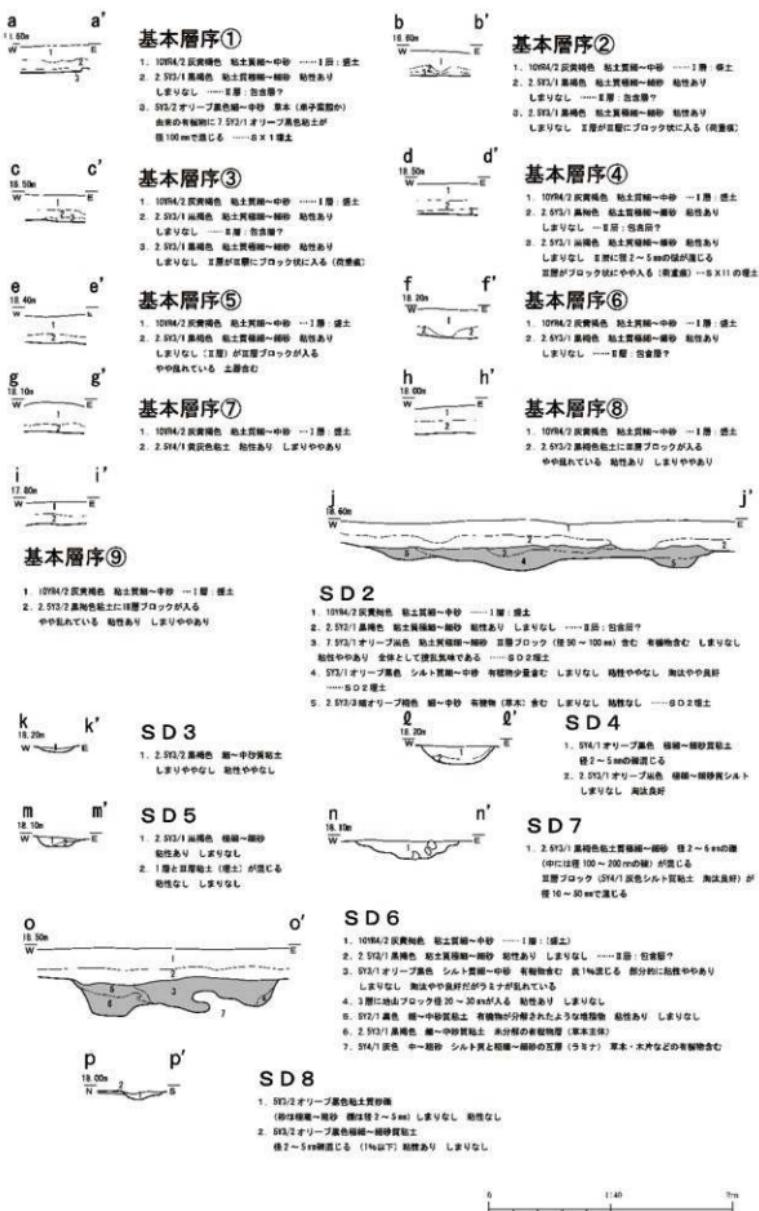
第13図 小長沢Ⅱ遺跡 造構平面図3 (1 : 100)



第14図 小長沢Ⅱ遺跡 造構平面図4 (1:100)

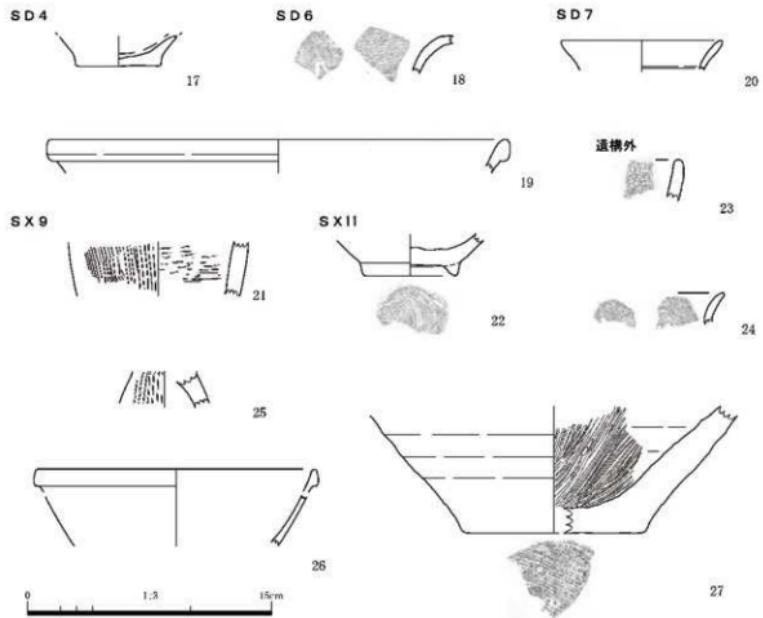


第15図 小長沢II遺跡 遺物出土状況図 (造構 1:20、遺物 1:4)
1.SD6 2.SX11



第16図 小長沢Ⅱ遺跡 基本層序・構造断面図 (1:40)

基本層序 SD2 SD3 SD4 SD5 SD6 SD7 SD8

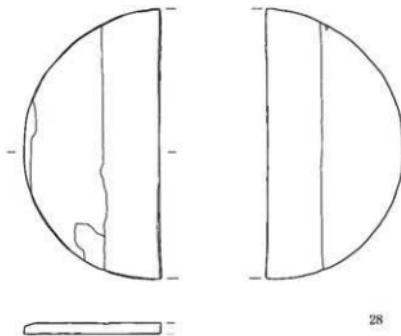


第17図 小長沢Ⅱ遺跡 遺物実測図1 (1 : 3)
 SD 4 (17) SD 6 (18・19) SD 7 (20) SX 9 (21) SX 11 (22)
 遺構外 (23~27)

第10表 小長沢Ⅱ遺跡 遺構一覧

遺構番号	種類	規模(cm)			時期	遺物	備考	挿図	写真
		長さ	幅	深さ					
SD 2	溝	(228)	580	40	古代以降	土師器、曲物底板	10, 11, 15, 18	7, 12	
SD 3		(222)	55	6	古代以降	-	10, 11, 16	8	
SD 4		(234)	120	28	古代以降	弥生土器、土師器	10, 11, 15, 17	8, 10	
SD 5		(250)	63	15	古代以降	-	10, 12, 16	8	
SD 6		(234)	345	51	古代以降	土師器、肥前系、曲物底板、棒状木製品	10, 12, 15~18	8~12	
SD 7		(236)	169	29	近世以降	青磁	10, 12, 15, 17	9, 10	
SD 8		(202)	68	12	近世以降	土師器	10, 12, 16	9	
SX 1	落ち込み	(250) (101)	13	-	古代以降	-	10, 11	7	
SX 9		210	66	5	古代以降	弥生土器	10, 11, 17	9, 10	
SX 10		(1508)	120	8	古代以降	土師器	10~12		
SX 11		850	(110)	9	近世以降	土師器、棒状木製品	10, 12, 15, 17, 18	10, 12	
SX 12		818	(110)	4	古代以降	土師器	10, 13		
SX 13		174	126	5	古代以降	土師器	10, 13	9	

SD 2

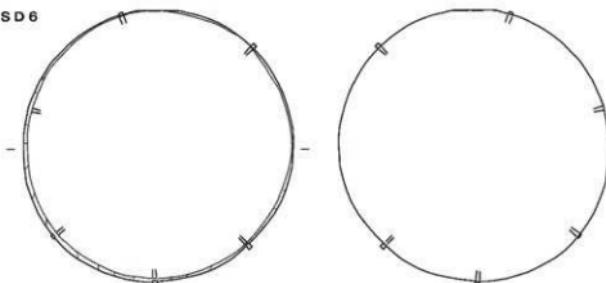


SD 6

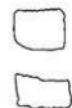


28

SD 6

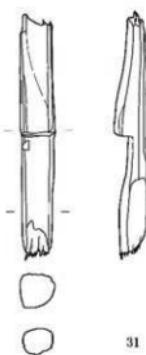


29



30

SX11



31



第18図 小長沢II遺跡 遺物実測図2 (1:3)
SD 2 (28) SD 6 (29・30) SX11 (31)

第 11 表 小長沢Ⅱ遺跡 土器・陶磁器一覧

探団	遺物番号	名義	出土地点 グリッド	種類	断面 形状	測定 (cm) 口径	高さ 底	重さ (g)	時期	測量		色調		出土 備考		
										外周	内周	外周				
										外周	内周	外周	内周			
17	17	SD-1	牛牛 土器	甌	底部	-	(1.9)	5.0	0.5	15.23	新石 後期	ミガキテ 三足炉	青灰	7.5YR7/4に近い褐色	赤色粒、 白色粒、 褐黄色調	
	18	SD 6	土師器	甌	颈部	-	(2.4)	-	0.6	4.43	吉良	ナナメハケ	ヨコハケ	10YR7/2に近い黄褐色	砂粒	
	19		陶器	瓶	口部断面	28.0	(2.0)	-	0.3	13.73	近世	ロクロナデ・歌伎	SYRSG 塗装褐色	砂粒		
	20	SD 7	青磁	甌		(10.0)	(1.8)	-	0.4	3.66	中後	1型?	青磁釉	SYRSG 黄オリーブ色	同上	
	21	A64	SX 9	牛牛 土器	甌	颈部	-	(3.4)	-	1.0	21.54	牛牛	中～後期	タテハケ、 ヨコハケ、 一部ログ	10YR7/2に近い黄褐色	白色粒、 白色粒
	22	SX 11	土師器	釜	底部	-	(2.5)	5.6	0.7	44.92	古代	底部付銀色 切りミロク ロクロナデ・漆脱	2.5YR7/2 黄褐色	白色粒、 赤色粒、 褐色粒		
	23		土師器	甌	山脈断面	-	(2.6)	-	0.8	4.91	縄文	中～後期	ココナデ・ 織柄	7.5YR6/4に近い褐色	赤色粒、 白色粒	
	24		土師器	甌		-	(1.9)	-	0.5	2.80	古良	織柄	7.5YR7/3 に近い褐色			
	25		土師器	支杯?		-	(2.3)	-	0.9	13.35		タテハケ→ 織柄	ケズリ?→ 織柄	2.5Y7/4 に近い褐色 10YR7/2 に近い褐色	赤色粒、 白色粒、 岩美、海石	
	26		白磁	甌	颈部	-	(3.1)	-	0.4	5.24	中後	W級 白磁釉	IDYR1 黄白色			
	27		陶器	粗陶	底部	-	(7.7)	11.0	1.7	248.25		V～ VI級 底削 ナダ	底削水切引、 脚口	N69 灰色	N7/0 灰白色	海藻骨質

第 12 表 小長沢Ⅱ遺跡 木製品一覧

探団	遺物番号	写真	出土地点			種類	断面		測定 (cm)			時期	備考
			グリッド		直角		長さ	幅	厚さ				
			SD 2	SD 6	Ne1		山物	基盤					
18	28	12		SD 6		木製品	山物	基盤	16.8	16.5	0.7	古代以前	半分欠損
	29	11							16.3	8.3	0.6		木釘焼る
	30				Ne1		棒状		(41.0)	3.2	2.2		ヒド欠損
	31	12	S X 11						(5.7)	1.8	1.9		ヒド欠損

6 自然科学分析

はじめに

小長沢Ⅱ遺跡は宮山市西部（旧轟負郡轟中町小長沢地区）に位置し、井田川流域平野（深井 1979）西部の自然堤防上及び後背湿地上に立地する。

公益財團法人富山県文化振興財團（以下、財團と略称）が小長沢Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した構（SD 6）を対象に、SD 6 の機能していた時期を明らかにし、当時の遺跡内及び周辺地域での古植生の変遷を明らかにする目的で委託し、文化財調査コンサルタント株式会社が受託・実施した。

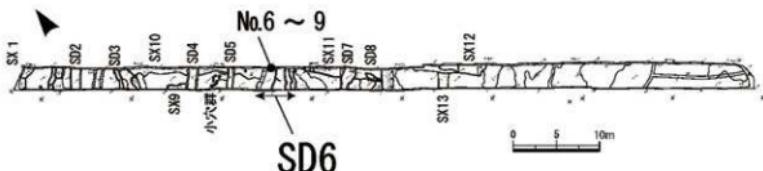
（1）分析試料について

調査区平面図（第 19 図）中に SD 6 での試料採取地点を、北 SD 6 断面図（第 20 図）中に各試料の採取層準を示す。図中の⑥～⑨がおよその試料採取位置で、⑥～⑨で花粉分析試料、⑥、⑧、⑨で年代測定試料が採取されていた。

第 13 表に年代測定試料一覧を、第 21 図に試料の状況写真を示す（試料一覧には、年代測定前処理法、年代測定結果も併記した）。

（2）分析方法

A 微化石概査方法

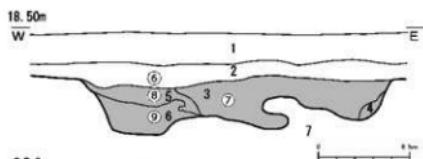


第 19 図 試料採取地点（SD 6）

花粉分析用プレパラート、及び珪藻分析用プレパラートを観察し、花粉（孢子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、5 段階で示した。

B 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同



- SD 6
1. 0m/4.7 深青褐色、粘土質箇所～中砂 ……1 層（疊土）
2. 2.5m/1 黒褐色、粘土質箇所～細砂、粘性あり しまりなし ……2 層（包含層）
3. 3.7m/1 オリーブ褐色、シルト質箇所～中砂、有機物含む、炭 1 箇混じる 部分的に粘性ややあり しまりなし、油状やや良好だがラミナが乱れている
4. 3.7m/1 岩山ブロック径 20 ~ 30 mm 入る 粘性あり しまりなし
5. 5.7m/1 黒褐色、細～中砂質粘土、有機物が分解されたような堆積物、粘性あり しまりなし
6. 6.9m/1 黑褐色、細～中砂質粘土、未分類の有機物層（草木主体）
7. 8.0m/1 黄褐色、中～粗砂、シルト質と細砂～粗砂の互層（ラミナ）、草木・木片などの有機物含む

第 20 図 試料採取位置（SD 6）

第13表 年代測定試料一覧

試 料					前処理	測定番号
試料No	地図名	出土位置 (遺構ほか)	状況	重量(g)		
6	小長沢Ⅱ	SD6 2層	泥炭	78.519	- 湿式篩分: 106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)	PLD-50590
8	小長沢Ⅱ	SD6 5層	泥炭	65.851	- 湿式篩分: 106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)	PLD-50591
9	小長沢Ⅱ	SD6 6層	泥炭	91.492	- 湿式篩分: 106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)	PLD-50592
試料No	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	羅年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
6	-22.94 \pm 0.20	1745 \pm 21	1779 \pm 20	1780 \pm 20	242- 255 cal AD (16.6%) 286- 325 cal AD (51.7%)	232- 251 cal AD (26.8%) 277- 339 cal AD (68.7%)
8	-24.89 \pm 0.19	1748 \pm 21	1749 \pm 20	1750 \pm 20	250- 263 cal AD (12.8%) 275- 296 cal AD (19.9%) 311- 346 cal AD (35.5%)	243- 265 cal AD (94.4%) 370- 375 cal AD (1.1%)
9	-26.54 \pm 0.18	1846 \pm 21	1820 \pm 21	1820 \pm 20	210- 248 cal AD (66.0%) 300- 303 cal AD (2.3%)	132- 141 cal AD (1.2%) 158- 192 cal AD (5.7%) 200- 255 cal AD (72.6%) 286- 324 cal AD (15.9%)

時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。



第21図 年代測定試料

C AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成・精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5,568年で年代計算を行った。曆年代較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

(3) 分析結果

A 微化石概査結果

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、第14表のとおりである（植物片、微粒炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、植物硅酸体、火山ガラスは、花粉分析処理の残渣を観察した）。

第14表 微化石概査結果

試料No.	遺跡	遺構	地層	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
6			2層	◎	○	△	△×片	△	△
7	小長沢Ⅱ	SD6	3層	◎	◎	△×	×	△×	△
8			5層	○	◎	△×	△片	△	△
9			6層	◎	○	○	△片	○	○

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないと検出できる △：非常に少ない

△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

全ての試料から統計処理に十分な量が検出され、微粒炭の検出量も多かったが、植物片はやや少なかった。植物珪酸体は全体にやや少なく、珪藻は破片が僅かに検出された。また、火山ガラスはやや少なかった。

B 花粉分析結果

分析結果を第22図の花粉ダイアグラム及び、第15表の花粉化石組成表に示す。

花粉粒数ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基準にしている）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）の変化を示している。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

得られた花粉・孢子群集の特徴は、下記の通りであった。

木本花粉ではスギ属が高率を占め、更に増加傾向を示す。これに対し、コナラ属は下部では10%を超えるスギ属に次ぐが、減少傾向を示し、最上部では3.7%まで減少する。

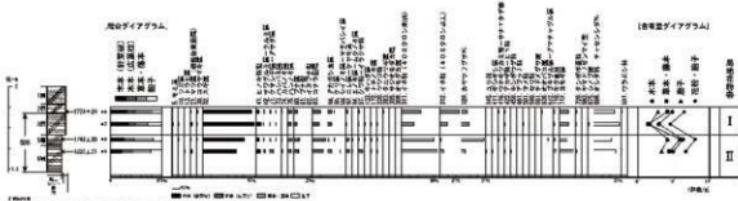
草本花粉はバラツキが多いが、イネ科（40ミクロン未満）が高率を示す。また、最上部ではイネ科（40ミクロン以上）が急増している。

C AMS年代測定結果

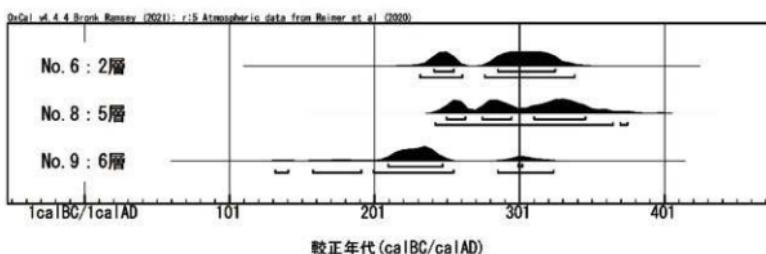
年代測定結果を第13表に示す。また、OxCal ver. 4.4 (Ramsey, 2009) による各試料の暦年較正図を第23図に示す。

第13表には、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の年代を示している。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。 ^{14}C 濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5,568年）を用いて計算した値である。



第22図 SD 6の花粉ダイアグラム



第24図 暗年校正年代一覧

次いでコナラ亜属が15%程度を示す。草本・藤本花粉では、イネ科(40ミクロン未満)が40%程度を示すほか、カヤツリグサ科が試料により28%と高率を示す。このほか、ヨモギ属が10%程度の出現率を示している。

I带(試料No.7、6)

木本花粉は引き続き45%程度と高い。試料No.7で胞子が27%、草本・藤本花粉が25%へと変化するが、試料No.6ではII带と同レベルになる。木本花粉では引き続きスギ属が高率を示し、60%程度まで増加する。草本・藤本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)が増加する。

(5) 年代測定結果と局地花粉帶、既知の花粉分析結果との関係

第24図に、年代測定結果をまとめた。この図から明らかなように、2層(試料No.6)と5層(試料No.8)で年代値の僅かな逆転が認められるが、誤差の範囲に収まることから、ほぼ同時期(弥生時代後期～古墳時代前期)を示すと考えられる。また、最下位の6層(試料No.9)は、やや古い年代値(弥生時代後期)であった。一方、SD6は、出土遺物から中世以降に埋まったと考えられていた。年代測定を行った3試料はいずれも「泥炭」であり、生物擾乱などのため実年代より古い年代値が得られることがある。このことから、二次堆積や生物擾乱のために実際より古い年代値が得られた可能性がある。

小長沢Ⅱ遺跡近隣の小長沢鎌蓋遺跡でも花粉分析が行われた(第V章6)。小長沢鎌蓋遺跡ではII带(b、a亜帯)、I带の花粉化石群集の変遷を示しており、II带～I带を通してスギ属の高率での出現と増加傾向が認められた。今回得られた局地花粉帶II、I带は、スギ属の出現率の変化とコナラ亜属、ブナ属の出現率の変化、I带でのイネ科(40ミクロン以上)の急増などから小長沢鎌蓋遺跡でのII带a亜帯、I带に対比できる。一方、小長沢鎌蓋遺跡では奈良～平安時代の年代測定結果が得られている。

このことから、小長沢Ⅱ遺跡での年代値が古い値を示しており、SD6が奈良～平安時代頃に堆積した可能性も指摘できる。一方、スギは調査地近辺の山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部に生育していたと考えられる。その分布規模が分からぬことから、局的に生育していたスギの影響で、偶然にも類似した花粉化石群集が得られた可能性も否定できない。

したがって、SD6の埋没時期(局地花粉帶II带、I带の示す時期)は得られた年代値通りの弥生時代後期～古墳時代前期、あるいは奈良～平安時代のいずれかと考えられる。

(6) 植生復元

花粉分析結果を基に局地花粉帯ごとに植生復元を行う。

II 帯（試料No.9～7）

遺跡近辺には湿地が広がり、アシやマコモなどのイネ科草本やハリイ類、ホタルイ類などのカヤツリグサ科、セリ類などが生育していたと考えられる。また、やや乾燥した場所にはヨモギ類などのキク類も生育していたと考えられる。

また、高率で出現するスギ属は、遺跡近辺に生育していたものと考えられ、射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。また、射水丘陵性山地から南に続く山地の低所では照葉樹林が広がる一方、山地高所にはブナ林が分布し、更に高所にはトウヒやコメツガなどが亜高山帯林を成していたものと考えられる。

I 帯（試料No.6）

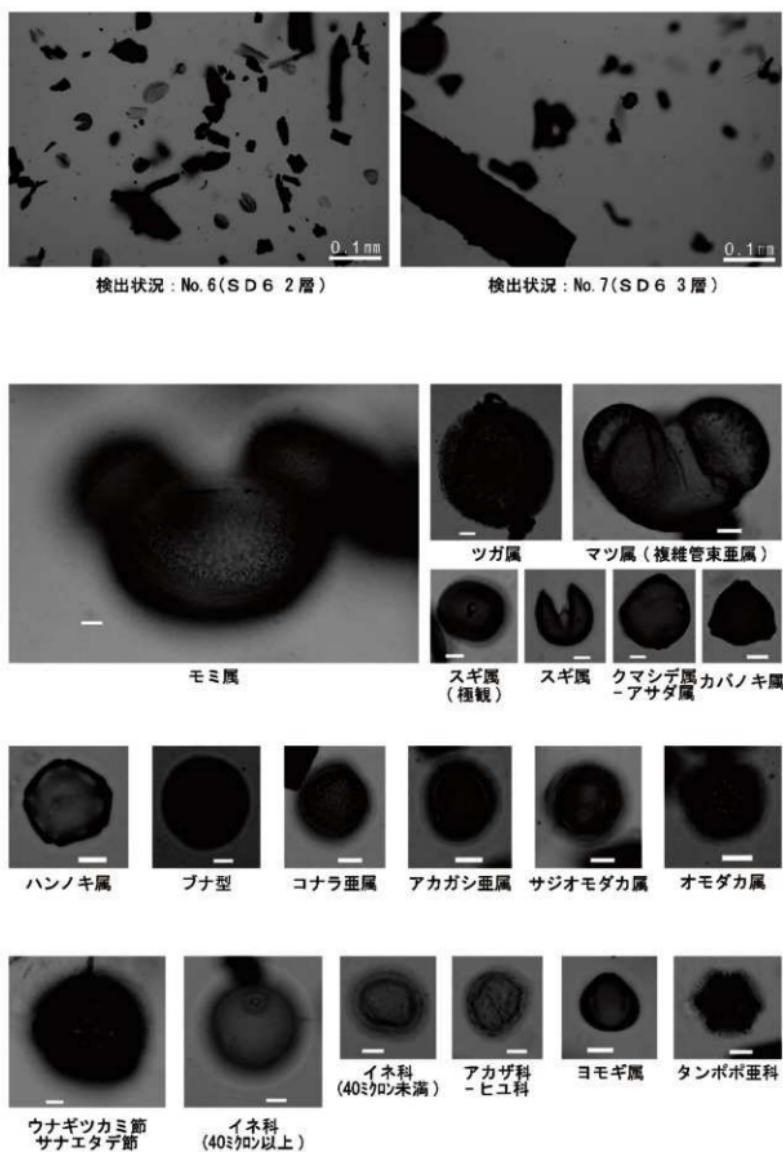
イネ科（40ミクロン以上）が急増することから、周辺地域の開墾が始まり稻作が行われたと考えられる。一方スギ属は、II帯から更に増加する。引き続き遺跡近辺に生育していたものと考えられ、II帯同様に射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。

まとめ

令和4（2022）年度に行った小長沢II遺跡の発掘調査において、SD6内部から採取された試料の花粉分析及びAMS年代測定を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

- ① AMS年代測定値として、6層（試料No.9）から $1,820 \pm 20$ yrBP（暦年較正年代：132～324 calAD：2σ 弥生時代後期～古墳時代前期）、5層（試料No.8）から $1,750 \pm 20$ yrBP（暦年較正年代：243～375 calAD：2σ 古墳時代前期）、2層（試料No.6）から $1,780 \pm 20$ yrBP（暦年較正年代：232～339 calAD：2σ 古墳時代前期）の年代値を得た。年代値に僅かな逆転現象が認められたが、誤差の範囲に収まることから、妥当な値と考えられる。
- ② 隣接する小長沢鎌蓋遺跡NR1内堆積物の花粉分析結果では、SD6内で得られた花粉化石群集と極めて類似した花粉化石群集が得られていた。また、小長沢鎌蓋遺跡で得られた年代値は奈良時代～平安時代を示すものであった。花粉化石群集の対比を尊重すると、小長沢II遺跡で得られた年代値は、二次堆積や生物擾乱のために実際より古い年代値が得られた可能性も指摘できる。
- ③ 花粉分析結果を基に、I、II帯の局地花粉帯を設定した。更にII帯をa、b亜帯に細分した。
- ④ 花粉分析を基に、遺跡近辺から周辺の山地での古植生を推定した。特筆すべき事柄を、以下に示す。
 - ・ II帯の時期（弥生時代後期～古墳時代前期、あるいは奈良～平安時代）には、湿地環境であったが、I帯の時期には開墾が進み稻作が行われた。
 - ・ II帯の時期以降、山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていたと考えられる。

（文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳）



第25図 花粉分析写真

記述のあるもの以外、スケールバーは 0.01mm

第V章 小長沢鎌蓋遺跡

1 概要 (第26図、図版1・13)

小長沢鎌蓋遺跡は、富山市教育委員会によって平成30（2018）年度から令和3（2021）年度まで行われた県営整備事業に伴う試掘調査の結果、それまで小長沢Ⅱ遺跡の遺跡範囲にあった南側が切り離され、さらに3か所に分割されて令和3（2021）年度に新規登録となった遺跡である。登録時の遺跡種別は、弥生時代と古代の集落である。

令和4（2022）年度の調査地は、3か所に分割された遺跡範囲のなかで一番北にあたり、小長沢字鎌蓋。その西端で、南西から北東に走る宮下排水路の付け替え部分にあたる。調査区は排水路部分のため、幅約2.4m、長さ約22.8m、面積56m²と細長くなっている。遺跡の現況は水田で、西側は宮下排水路の土手状となっている。なお、土手状部分は、昭和31（1956）～34（1959）年の宮下排水路建設時に擾乱が及んでいる。標高は、18mである。検出した遺構は、自然流路。出土遺物は土師器2、越中瀬戸1、肥前系陶磁器5点の計8点（66.70g）である。

2 層序 (第27図、図版14)

基本層序は、I層からV層の大きく5層に分けられる。I層は現表土で、稲株の入る灰黄褐色シルト。II層は水田の床土などの盛土で、オリーブ黒色シルト。III層は地山で、遺構検出面となり、灰色砂質シルト。IV層も地山で、灰色粘質土。V層も地山で、遺構検出面となり、オリーブ灰色粘質土。遺物包含層はなかった。地山のIII・IV層は調査区の南側のみにあり、それより北はII層下にV層となっている。遺構は、V層直上で自然流路（NR1）を確認した。遺物はすべて表土からの出土であり、遺構からの出土はない。

3 遺構 (第26・27図、図版14、第16表)

検出した遺構は、自然流路（NR1）である。

（1）自然流路

1号自然流路（NR1、第26・27図、図版14）

自然流路は、調査区の北側で検出した。南側の肩部は確認されたが、北側は調査区外となるため、川幅は不明である。深さは、検出面から最も深いところで1mに達する。なお、東に隣接する現況の宮下排水路の底面より深くなったため、崩落の危険性があり、西側の壁面沿いに入れたトレーンチのみで底面まで掘削を行った。南側の肩部の方向からみると北西から南東方向で、おそらく南側の山川川から北側の平野部へ丘陵部を蛇行しながら流れていたものと考えられる。埋土は上位に6・7層（黒褐色シルト）が堆積し、そのあいだには青灰色の細かい砂を見ることができ、流水がうかがえる。中位は植物遺体（ビート）を多く含む8層（灰オリーブ色シルト）が堆積し、湿地状の堆積がうかがえる。下位は南側に植物遺体（ビート）を多く含む9層（暗褐色シルト）・10層（オリーブ黒色シルト）

ルト）が堆積する部分と北側にも10層（オリーブ黒色シルト）が堆積する部分がある。つまり、NR 1とした自然流路は、元々南側と北側の2本からなり、いつかの時点で1本となって中位・上位層が堆積したと考えられる。なお、調査区内で北側の層を検出できなかったが、北に向かって地山が高くなっていることを考えると、それほど遠くはないと考えられる。自然流路の埋没時期は、遺物が出土していないのではっきりしない。このため、流路埋土から土壤サンプルを採取し、環境復元のために花粉分析と年代推定にAMS年代測定を行った。その結果、湿地性の堆積環境と10世紀を中心とする年代を得た。

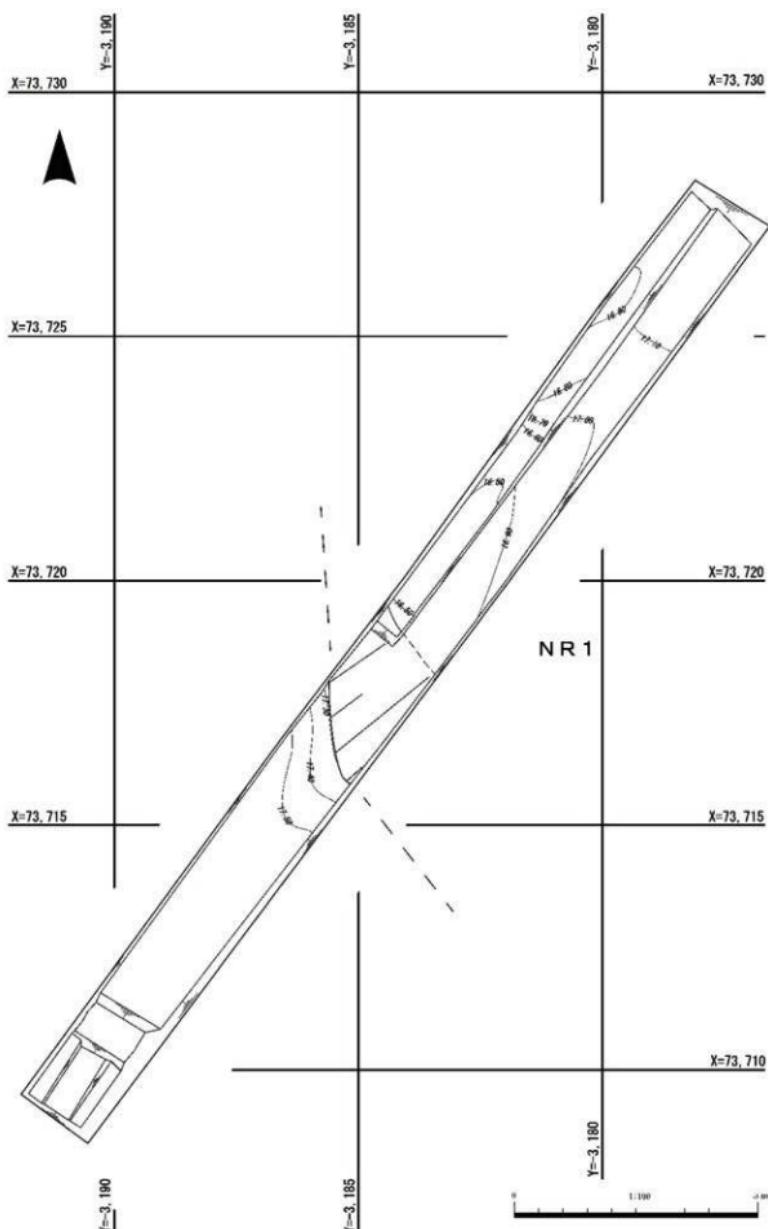
4 遺物（第28図、図版15、第17表）

遺物は土師器2、越中瀬戸1、肥前系陶磁器5点の計8点（66.70g）である。いずれも表土からの出土で、原位置を保っているとは言い難い。32・33は土師器の小片。32は胸部、33は底部か。時期は不明。34は越中瀬戸の播鉢。内面にわずかに御日と鏡軸が残る。35～39は肥前系陶磁器。35は唐津の京焼風とみられる小片。36～39は染付で伊万里とみられる。36は内面に草花文を描く皿。37は外面に草花文を描く碗。38は波状の文様を重ねる波貝文とみられる碗。39は鮮やかな色彩で草花文を描く碗。このほかに遺物はなかった。

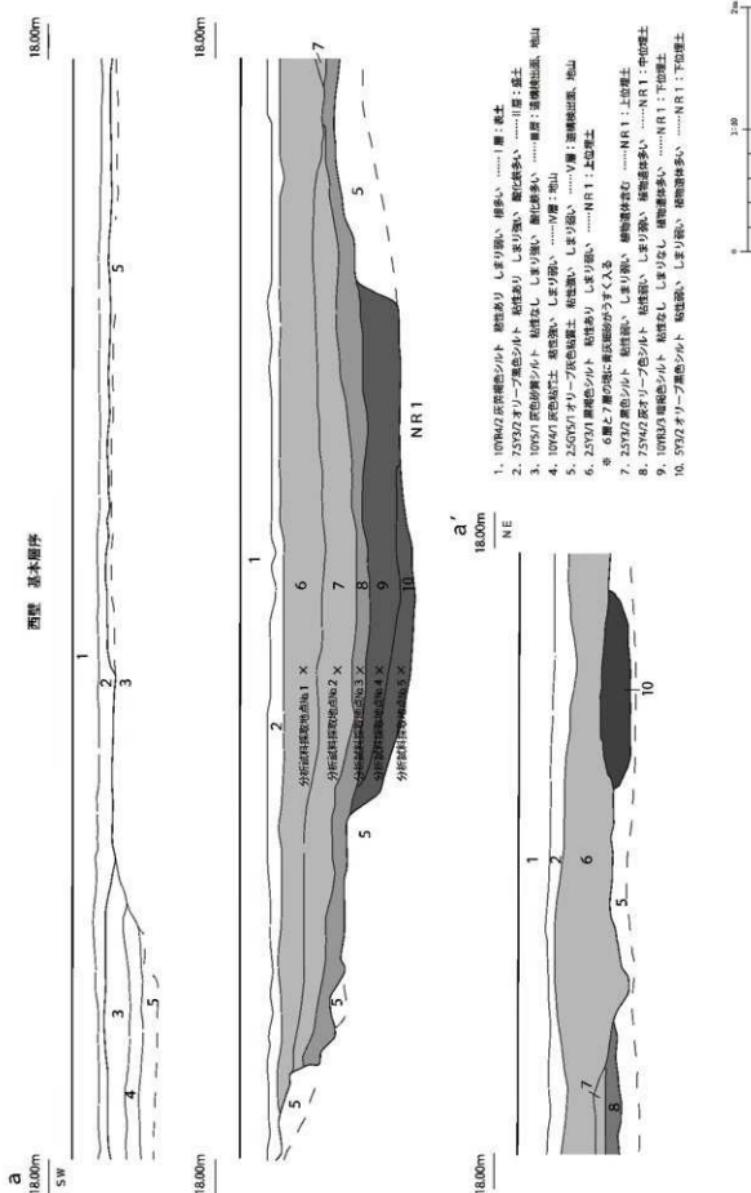
5 小括

今回の調査では、自然流路とわずかな遺物の出土にとどまった。自然流路NR 1の埋土より遺物の出土がなかったため、時期比定は難しかった。このため、埋土土壤の年代測定とあわせて花粉分析を行った。その結果、埋土下層の年代が10世紀を中心とする値を示し、自然流路NR 1は平安時代以降に堆積したと考えられる。ただし、年代測定からは、埋土上位と下位とで大きな時期差はみられなかった。また、花粉分析からは湿地性の堆積が想定される。このことから、自然流路NR 1は山田川の支流の一部とみられ、埋没後に水山となり今に至る様相が考えられる。遺跡の本体は、丘陵に近い西側か調査区南側の遺跡範囲2か所となるのだろう。

（町田賛一）

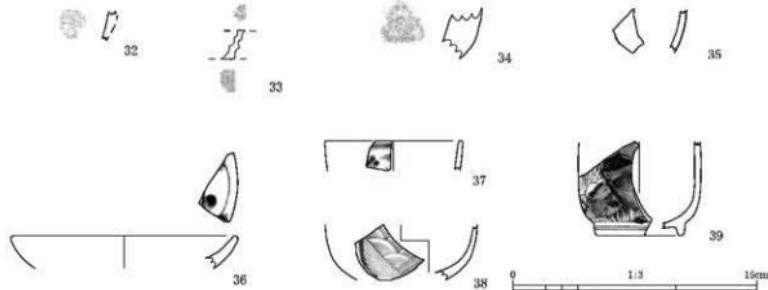


第26図 小長沢鍍蓋遺跡 造構全体図 (1 : 100)



第27図 小長沢鍊蓋遺跡 基本層序・造構断面図 (1:40)
基本層序 NR1

遺構外



第 28 図 小長沢鍍蓋遺跡 遺物実測図（1：3）
遺構外（32～39）

第 16 表 小長沢鍍蓋遺跡 遺構一覧

遺構番号	種類	規模(cm)			時期	遺物	備考	坪圖	写真
		長さ	幅	深さ					
NR 1	自然流路	(200)	(1,400)	108	古代以降	-	花粉分析、AMS年代測定を実施	27	14

第 17 表 小長沢鍍蓋遺跡 遺物一覧

探査 番号	遺物 番号	事当 番号	山上地点		種類	基盤		法面 (m)		重さ (g)	時期	調整		色調	胎土	備考		
			グリッド	遺構		高さ	幅	高さ	幅			外面	内面					
						不規						外壁	内面					
29	32	Na 1～2			土師器	底部	-	-	-	0.5	1.90	古墳～宮代	乳頭	ナデ→擦耗	7.5V67/4 にぶい褐色	赤色粒、 白色粒、 海綿骨片		
	33	Na6～1				底部	-	-	-	0.4	5.15		ナデ		10YR7/2 にぶい黃褐色	白色粒		
	34					瓶中 瓶口	腹部	-	-	1.8	39.80		ナデ→擦耗	剥落→鉛鉛→擦 耗	SYIGU 帶赤褐色	赤色粒、 白色粒		
	35	Na 1～2				底部	剥落	-	-	0.5	1.74		透明釉		3Y6/2 淡オリーブ色			
	15	Na6～1			遺構外 表土	皿	口縁部	14.0	-	-	0.6	7.15	近世	透明釉	染付（草花文） →透明釉	10YR7/2 にぶい黃褐色		
	36											透明釉	染付（草花文） →透明釉	2.5V7/2 灰蓝色				
	37					口縁部	8.3	-	-	0.4	1.53	透明釉	染付（草花文） →透明釉	7.5V65/4 にぶい褐色				
	38	Na6～1				剥落	-	-	-	0.5	9.61	透明釉	染付→透明釉					
	39	Na 1～2				底部	-	-	-	0.4	39.82		透明釉	染付（概念？） →透明釉	7.5V67/3 にぶい灰色			

6 自然科学分析

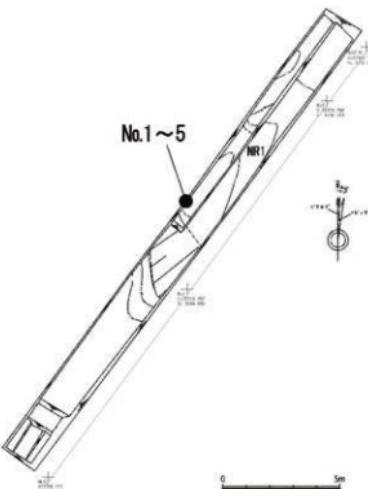
はじめに

小長沢鍊蓋遺跡は富山市西部（旧婦負郡婦中町小長沢地区）に位置し、井山川流域平野（深井, 1979）西部の後背湿地上に立地する。

公益財団法人富山県文化振興財団（以下、財団と略称）が小長沢鍊蓋遺跡の発掘調査で検出した自然流路（NR 1）を対象にNR 1の機能していた時期を推定し、当時の遺跡内及び周辺地域での古植生の変遷を明らかにする目的で委託し、文化財調査コンサルタント株式会社が受託・実施した。

（1）分析試料について

調査区平面図（第29図）中に試料採取地点を北西壁断面図（第30図）中に各試料の採取層準を示す。図中の①～⑤がおおよその試料採取位置で、①～⑤で花粉分析試料、①、③、⑤で年代測定試料が採取されていた。第18表に年代測定試料一覧を、第31図に試料の状況写真を示す（試料一覧には、年代測定前処理法、年代測定結果も併記した）。



第29図 試料採取地点(NR 1)

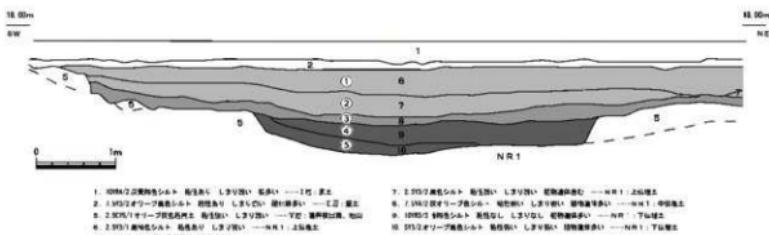
（2）分析方法

A 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び珪藻分析用プレパラートを観察し、花粉（孢子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物硅酸体の含有状況を概観し、5段階で示した。

B 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同

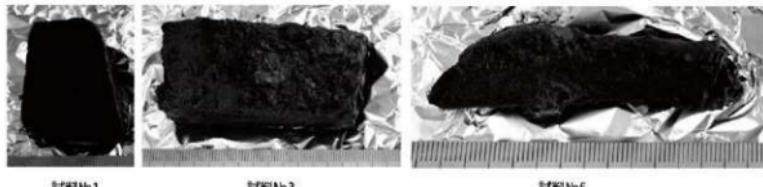


第30図 試料採取位置(NR 1)

第 18 表 年代測定試料一覧

試 料					前処理	測定番号	
試料No	遺跡名	出土位置 (遺構ほか)	状況	重量(g)			
1	小長沢縫合	NR1 6 層	泥炭	87.869	-	湿式篩分: 106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)	PLD-50587
3	小長沢縫合	NR1 8 層	泥炭	62.5	-	湿式篩分: 106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)	PLD-50588
5	小長沢縫合	NR1 10 層	木片(枝片?)	9.144	-	湿式篩分: 106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)	PLD-50589

試料No	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正無年代表 (yrBP $\pm 1\sigma$)	羅年較正用年代表 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲		
					1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲	
1	-27.20 \pm 0.39	1181 \pm 20	1144 \pm 20	1145 \pm 20	883- 900 cal AD (18.0%) 918- 966 cal AD (46.1%) 966- 972 cal AD (4.1%)	773- 786 cal AD (4.7%) 831- 852 cal AD (4.8%) 874- 980 cal AD (86.0%)	
3	-25.91 \pm 0.18	1415 \pm 20	1399 \pm 20	1400 \pm 20	610- 617 cal AD (10.5%) 610- 659 cal AD (57.8%)	605- 663 cal AD (95.4%)	
5	-29.48 \pm 0.20	1210 \pm 20	1136 \pm 20	1135 \pm 20	887- 900 cal AD (12.7%) 918- 973 cal AD (55.6%)	774- 784 cal AD (2.3%) 878- 994 cal AD (93.2%)	



第 31 図 年代測定試料

定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分した。

C AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。その後、二酸化炭素を生成・精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5,568 年で年代計算を行った。曆年代較正には OxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

（3）分析結果

A 微化石概査結果

花粉分析用プレベラート及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、第 19 表のとおりである（植物片、微粒炭は花粉分析用プレベラートを観察した。珪藻、植物硅酸体、火山ガラスは、花

第19表 微化石概査結果

試料No.	道跡	道構	地層	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	小長沢 鍾乳 NR1	NR1	6層	◎	○	○	△×片	○	△
2			7層	○	○	◎	△×片	○	△
3			8層	◎	◎	○	◎	△	△×
4			9層	○	△	○	○片	△×	△×
5			10層	◎	△	○	◎	△	△×

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない
 △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

粉分析処理の残渣を観察した)。

全ての試料から統計処理に十分な量が検出された。微粒炭、植物珪酸体は下位の試料でやや少なく、珪藻は下位の試料で多い傾向にあった。植物片は押しなべてやや多かった。また、火山ガラスはやや少なかった。

B 花粉分析結果

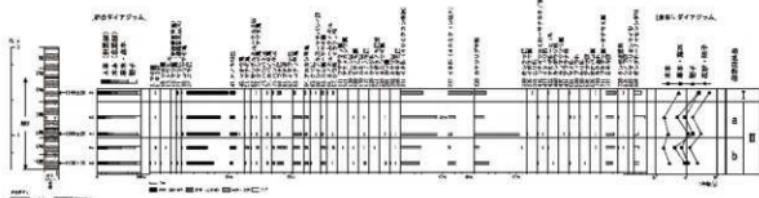
分析結果を第32図の花粉ダイアグラム及び、第20表の花粉化石組成表に示す。

花粉粒数ダイアグラムでは、分類ごとに百分率(百分率の算出には、木本花粉総数を基準にしている)を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量(湿润試料1g中の粒数)の変化を示している。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)とイネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分した。

得られた花粉・胞子群集の特徴は、下記の通りであった。

木本花粉ではスギ属が高率を占め、更に増加傾向を示す。これに対しブナ属(ブナ型、イヌブナ型を含む)、コナラ亜属は下部では10%程度とスギ属に次ぐが、減少傾向を示し、最上部では数%まで減少する。

草本花粉はバラツキが多いが、イネ科(40ミクロン未満)が高率を示す。また、最上部ではイネ科(40ミクロン以上)が急増している。



第32図 NR1の花粉ダイアグラム

かにして得られた曆年代較正データ IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いて較正したものである。較正には OxCal ver. 4.4 (Ramsey, 2009) を用いている。また、OxCal での較正計算には曆年較正用年代を用いている。

(4) 局地花粉帯の設定

花粉分析結果を基に I、II 帯の局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を下位から示す。

II 帯（試料No.5～2）

スギ属が 30～50% 程度と高率で、増加傾向を示す。下部（試料No.5、4）では木本花粉の割合が 50% と高く、検出分類群も多い。上部（試料No.3、2）では木本花粉の割合が 40～30% 程度へ下がり、草本・藤本花粉が 50% を超えるようになる。木本花粉の検出分類群が下位に比べ減少し、多くの分類群で出現率も低下する。草本・藤本花粉では、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科が著しく増加する。このようなことから、下部を b 亜帯、上部を a 亜帯とした。

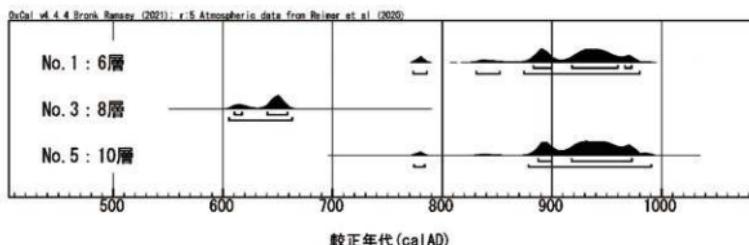
I 帯（試料No.1）

試料No.1 では、スギ属が更に増加し 59% となる。併せてその他の分類群の出現率は低下するが、例外的にマツ属（複維管束亜属）は増加する。草本・藤本花粉ではイネ科（40 ミクロン以上）の増加が特徴的である。

(5) 年代測定結果と局地花粉帯、既知の花粉分析結果との関係

第34図に、年代測定結果をまとめた。この図から明らかかなように、8層（試料No.3）で年代値の逆転が認められる。3試料の内、10層（試料No.5）は小径の「枝」であり、年代測定試料としては条件の良いものであった。一方、他の2試料は「泥炭」であった。「泥炭」を対象とした年代測定では、生物擾乱などのため実年代より古い年代値が得られることがあることから、10層の年代値が真的値であり、少なくとも 8層（試料No.3）では実施より古い年代値が得られたと考えられる。したがって、10層（試料No.5）が平安時代に堆積したもので、上位の2層はこれ以降に堆積したと考えられる。

射水丘陵性山地（深井, 1978）を挟んで、小長沢鎌蓋遺跡の北西 6 km に位置する南太閤山 I 遺跡では、弥生時代後期～古墳時代中期の年代がえられた堆積物（ただし、1.6 m 下位からもほぼ同年代の年代測定値が得られている）。また、昭和 59（1984）年富山県教育委員会調査時には、同準準と考えられる層から古墳時代中期～奈良時代の遺物が出土（岸本他 1985）し、令和 2（2020）午財团調査時には花粉分析が実施されている（渡辺 2023）。ここではスギ属の増加傾向とコナラ亜属、ブナ属（ブナ型、イヌブナ型含む）の安定した出現で特徴付けられた局地花粉帯（I 帯）が設定されていた。一方、南太閤山 I 遺跡では今回の分析結果に比べスギ属が低率で、コナラ亜属、ブナ属は高率を示している。両遺跡は丘陵を挟んだ地点であるが、南太閤山 I 遺跡の I 帯と小長沢鎌蓋遺跡の II 帯が連続しているように観える。ただし、後述のようにスギが局所的に生育していた可能性も指摘され、前述のような現象が見かけ上の現象である可能性も否定できない。南太閤山 I 遺跡との比較からは、10層で得られた平安時代の年代値が真的年代値に近く、今回の分析結果は平安時代以降の植生を反映したものと考えられる。



第34図 暈年較正年代一覧

(6) 植生復元

花粉分析結果を基に局地花粉帯ごとに植生復元を行う。

II带（試料No.5～2）

遺跡近辺には湿地が広がり、アシやマコモなどのイネ科草本やハリイ類、ホタルイ類などのカヤツリグサ科、ガマ類、ミクリ類、オモダカ類、ホシクサ類、イボクサ類、セリ類などが生育していたと考えられる。また、やや乾燥した場所にはヨモギ類などのキク類も生育していたと考えられる。

また、高率で出現するスギ属は、遺跡近辺に生育していたものと考えられ、射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。また、射水丘陵性山地から南に続く山地の低所では照葉樹林が広がる一方、山地高所にはブナ林が分布し、更に高所にはトウヒやコメツガなどが亜高山帯林を成していたものと考えられる。また、コナラ亜属の代表的な種には冷温帯に分布するミズナラと温帯に広く分布するコナラがある。b亜帯～a亜帯でのブナ属減少と相関を示さないことから、a亜帯で検出されたコナラ亜属の多くは射水丘陵性山地に分布した薪炭林を構成したコナラに由来した可能性が指摘できる。

I带（試料No.1）

イネ科（40ミクロン以上）が急増することから、周辺地域の開墾が始まり稲作が行われたと考えられる。一方スギ属はII带から更に増加する。引き続き遺跡近辺に生育していたものと考えられ、II带同様に射水丘陵性山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていた可能性が指摘できる。

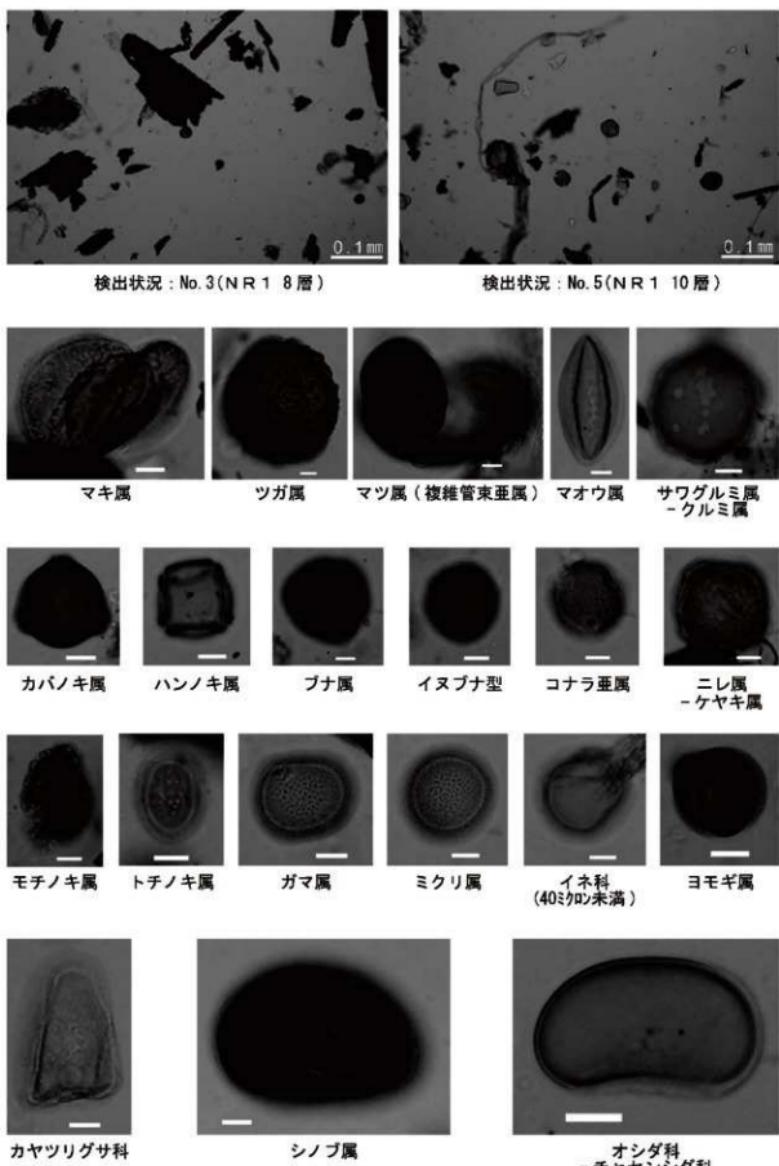
まとめ

令和5（2023）年度に行った小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査において採取された試料の花粉分析及びAMS年代測定を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

- ① AMS年代測定値として、10層（試料No.5）から $1,135 \pm 20$ yrBP（暈年較正年代：774～990 cal AD : 2σ 奈良～平安時代）、8層（試料No.3）から $1,400 \pm 20$ yrBP（暈年較正年代：605～663 calAD : 2σ 飛鳥時代）、6層（試料No.1）から $1,145 \pm 20$ yrBP（暈年較正年代：773～980 calAD : 2σ 奈良～平安時代）の年代値を得た。試料間で逆転が認められたが、試料の性質から10層（試料No.5）がより正確な値であり、8層（試料No.3）では、生物擾乱などにより古い年代値が得られたものと考えられる。

- ② 花粉分析結果を基に、I、II帯の局地花粉帯を設定した。更にII帯をa、b亜帯に細分した。
- ③ 花粉分析を基に、遺跡近辺から周辺の山地での古植生を推定した。特筆すべき事柄を以下に示す。
 - ・II帯の時期（奈良～平安時代）には湿地環境であったが、I帯の時期には開墾が進み稻作が行われた。
 - ・II帯の時期以降、山地斜面の谷沿いや遺跡の立地する氾濫原の内部にまでスギ林が広がっていたと考えられる。

（文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳）



第35図 花粉分析写真

記述のあるもの以外、スケールバーは 0.01mm

第VI章 総括

ほ場整備事業に伴う令和4（2022）年度の下呂遺跡と小長沢Ⅱ遺跡、令和5（2023）年度の小長沢鎌蓋遺跡の発掘調査では遺構は少なく、溝や自然流路の検出にとどまった。これは調査対象地が排水路部分という狭小であったというだけではなく、富山市教育委員会が大規模な試掘調査を行い、その結果、令和3（2021）年度に遺跡の範囲の大幅な変更まで行われ、遺跡が点在していることにもつながる。“小長沢”の地名の由来が長沢川（現、山田川）の河原であったというように、調査地のある小長沢地区は蛇行する河川のなかにあったのだろう。はからずも今回の調査で検出した自然流路はその一部といえ、それを証明するようである。富山市教育委員会の試掘調査では、縄文時代から中世の遺構・遺物がみつかっている。しかし、今回の調査区はきわめて限られた地点であり、遺跡範囲は広いが、集落は蛇行した河川で残った島状の安定した部分を利用していたのではないだろうか。

小長沢地区ではこれまでに何度か発掘調査は行われていたが、自然科学分析は実施されていなかった。最後に、花粉分析を行った近隣の遺跡（第36図）と比較してみよう。

今回の調査地の西側で丘陵上にある二本榎遺跡では、7世紀初頭の横穴式石室をもつ円墳堆積土で花粉分析が行われている。花粉は僅かな産出にとどまるが、木本ではコナラ属コナラ亜属、ニレ属ニレヤキ属、スギ属、マツ属など、草本ではイネ科、ヨモギ属などがみつかっている（パリノ 2012）。

北方にある友坂遺跡では、13世紀を主とする区画溝と廐棄土坑の堆土、古代の地山で花粉分析が行われている。花粉は二本榎遺跡同様に僅かな産出にとどまるが、木本ではスギ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属など、草本ではイネ科、アカザ科、カヤツリグサ科、ソバ属などがみつかっている（パリノ 2020）。

南方にある富崎遺跡では、弥生時代終末から中世以降の円墳堆積土で花粉分析が行われている。花粉は木本ではスギが他を圧倒し、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ニレ属ニレヤキ属などが続く。草本ではイネ科が他を圧倒し、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、アカザ科ヒュウガ科などが続く。また、あわせて行われたプラント・オパール分析ではプラント・オパールが多産しており、弥生時代終末期以降に稻作が行われていたと推定している（パレオ 2008）。

今回的小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡の花粉分析では、木本ではスギ属が圧倒し、コナラ亜属などが続き、草本ではイネ科が圧倒し、ヨモギ属などが続く。これらから考えてみると、小長沢地区とその周辺ではスギ林が広がり、丘陵地にはコナラ属コナラ亜属などの広葉樹も生育していたことが想定できる。イネ科については水田の存在が考えられる。

富崎遺跡では弥生時代終末期から稻作を想定しているが、小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡の分析結果では古代以降からの想定となっている。友坂遺跡も古代以降で同様である。これについては、参考になるデータとして友坂遺跡の別地点で行われた地山の分析（パリノ 2019）がある。この分析では古代の遺構検出面である地山について観察を行い、洪水等で運ばれてきた土壤が堆積した氾濫堆積物との見解を示している。小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡は、友坂遺跡と同じ井田川や山田川と丘陵地に挟まれた平野に位置する。このことから小長沢Ⅱ遺跡と小長沢鎌蓋遺跡の遺構検出面である地山は、年代測定結果からみても友坂遺跡と同じ古代であったのではないだろうか。このため、地山の成因も同じで、稻作についても古代以降となったのだろう。

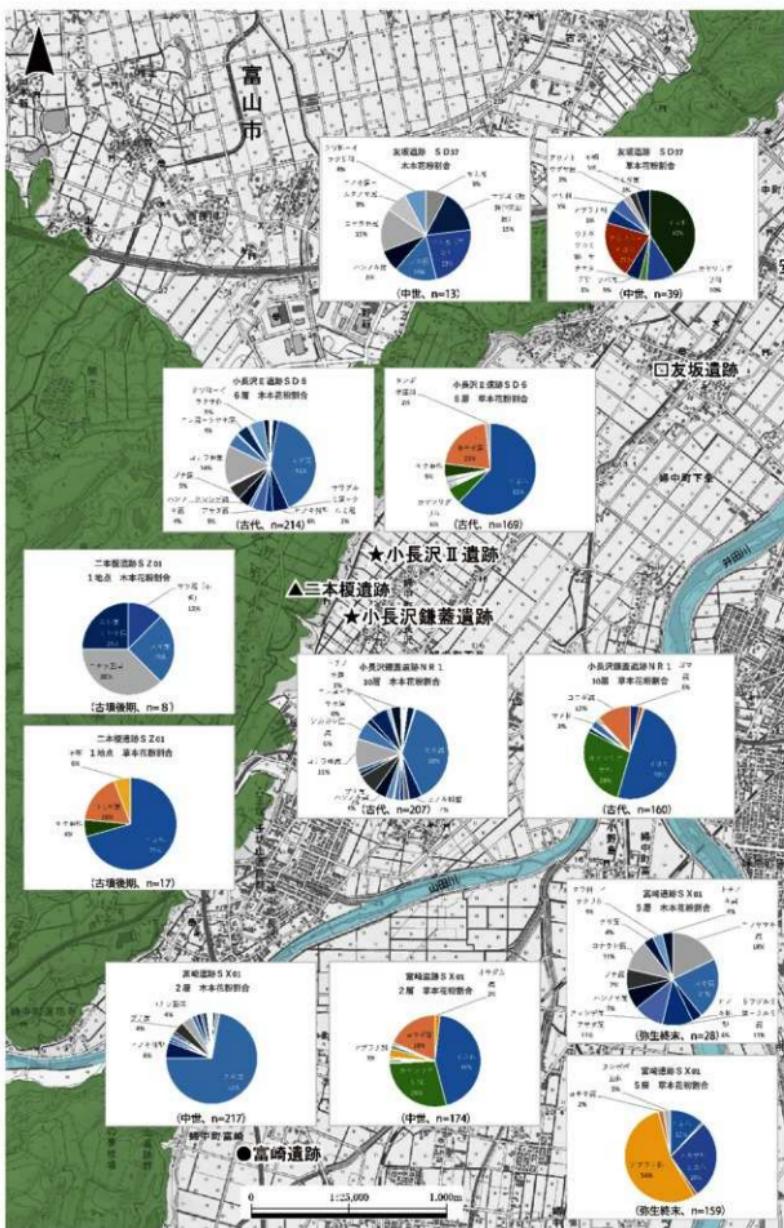
一方、宮崎遺跡は山田川の南側にあり、弥生時代終末期の遺構が多く見つかり、遺構検出面である

地山は弥生時代と考えられ、イネ科の花粉とともにプラント・オバールが多く産出している。こちらは弥生時代終末期には稻作が行われていたと考えられており、山田川をはさんで南の富嶽遺跡と北の友坂遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡で様相が大きく異なることが明らかになった。

今回の下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡の調査では、いずれの遺跡でも建物などの居住を示す遺構ではなく、集落の存在をみつけることはできなかった。けれども、溝や自然流路の土壌の自然科学分析を行ったことで、河川にはさまれた平野部における遺跡のあり方について考えられる成果を得た。今後、小長沢地区の歴史と環境の変遷を解き明かす上で貴重な資料となるだろう。(町田賢一)

引用・参考文献

- 株式会社パレオ・ラボ 2008 「平成19年度調査の理化学分析」『富山市宮崎遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
日本雅敏・関清・山本正敏 1985 「都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群 発掘調査概要(3) 南太閤山Ⅰ遺跡」富山県教育委員会
小長沢公民館建設委員会 2006 「小長沢公民館 新築記念記録誌」
鳥田亮仁 2023 「小長沢Ⅱ遺跡・下邑遺跡」「令和4年度 堀藏文化財年報」公益財団法人富山県文化振興財団堀藏文化財調査課 富山県堀藏郡役所 1909 「越中 緋負郡志」
中村純 1974 「イネ科花粉について、特にイネを中心として」『第四紀研究』13 日本国第四紀学会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2012 「「本桜遺跡の年代測定・微化石分析・石材鑑定」『富山市「本桜遺跡確認調査報告書』富山市教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2019 「地山の土壤観察」『富山市内遺跡発掘調査概要-21 一友坂遺跡』富山市教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 2020 「放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析」『富山市友坂遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
平凡社 1994 「日本歴史地名大系 第16巻 富山縣の地名」
深井三郎 1978 「地形分類図、土地分類基本調査 富山」富山県
深井三郎 1979 「地形分類図、土地分類基本調査 八尾」富山県
婦中・土地改良区堀藏委員会 1983 「婦中・土地改良区史」婦中・土地改良区
婦中町史編纂委員会 1996 「婦中町史 通史編」婦中町
婦中町史編纂委員会 1997 「婦中町史 資料編」婦中町
婦中町農協史編纂委員会 1975 「婦中農協史」婦中町農業協同組合
婦中町古里公民館 1994 「ふるさと 郷土の歴史と文化・丹発見」
山本正敏・島田英佐子・横山和美・中川道子・越前博子 1996 「梅原胡摩堂跡発掘調査報告(遺物編)」財団法人富山県文化振興財団堀藏文化財調査事務所
渡辺正巳 2010 「花粉分析法「必拂 考古資料の自然科学調査法」ニュー・サイエンス社。
渡辺正巳 2023 「微化石分析」「南太閤山Ⅰ遺跡発掘調査報告 - 主要地方道高岡小杉線道路改良事業に伴う堀藏文化財発掘報告-」
公益財団法人富山県文化振興財団堀藏文化財調査課



第36図 周辺の遺跡における花粉分析結果（1：25,000）

図版 1



航空写真

1. 1946年7月22日撮影 (国土地理院 USA-M203-A-7-123)
2. 2021年8月2日撮影 (国土地理院 CCR20211-C10-30)

図版 2



1



2

下呂遺跡 遠景

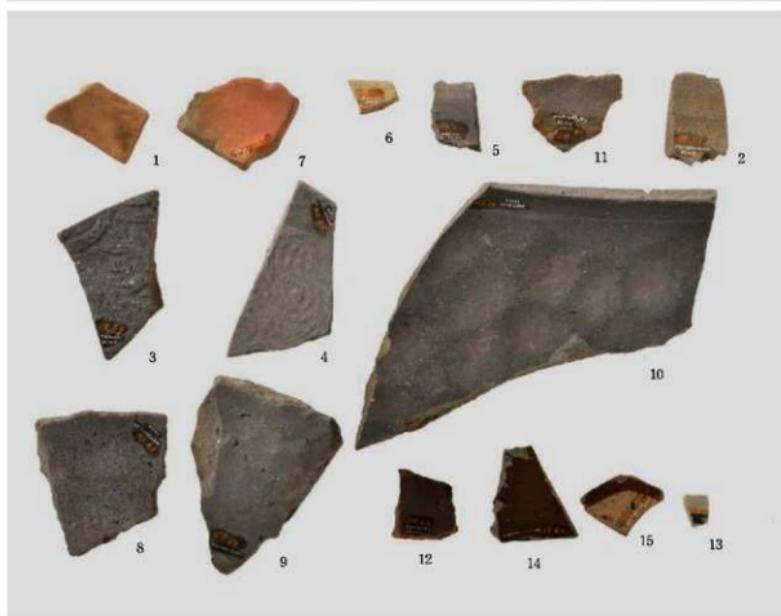
1. 西から 2. 南から



下色遺跡 全景・遺構

1. 全景 2. NR 1 (東から) 3. NR 1断面 (東から) 4. SD 2 (南から) 5. SD 2断面 (南から)

圖版 4



下邑遺跡 土器・陶磁器





1



2

小長沢Ⅱ遺跡 遠景

1. 西から 2. 北から



小長沢 II 遺跡 全景・遺構 (1)

1. 全景 2. 遺構検出作業 (西から) 3. SX 1 (北から) 4. SD 2 (南東から) 5. SD 2 断面 (南から)



小長沢Ⅱ遺跡 遺構(2)

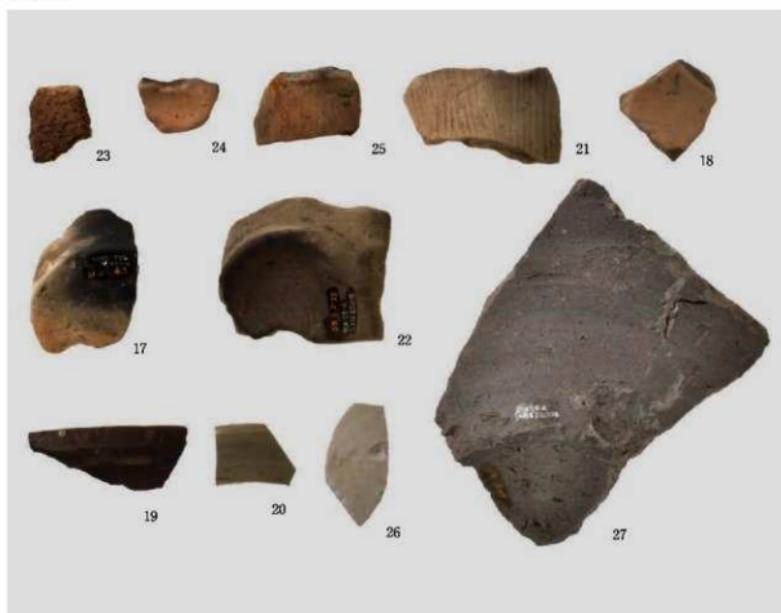
1. SD3 (南西から) 2. SD3断面 (南から) 3. SD4 (北から) 4. SD4断面 (南から)
5. SD5 (南西から) 6. SD5断面 (北西から) 7. SD6 (北西から) 8. SD6断面 (南から)



小長沢Ⅱ遺跡 遺構(3)

- | | | | |
|------------------|---------------------|---------------------|----------------|
| 1. SD 6作業状況（南から） | 2. SD 6木製品出土状況（南から） | 3. SD 7・8（北東から） | 4. SD 7断面（南から） |
| 5. SX 9作業状況（南から） | 6. SX 13作業状況（南から） | 7. SX 13土器出土状況（南から） | 8. 遺構発掘作業（西から） |

圖版 10



小長沢Ⅱ遺跡 土器・陶磁器





28



30



31



小長沢鍛蓋遺跡 遺景

1. 東から 2. 南から



小長沢鍛蓋遺跡 遺構

1. 調査路 (北から)
2. 機械掘削状況 (南から)
3. 南側基本層序 (東から)
4. 中央基本層序 (南東から)
5. 分析試料採取地点 (東から)
6. NR 1 (南から)
7. NR 1水没状況 (南から)
8. 現地調査終了後遠景 (西から)



小長沢鍾蓋遺跡 土器・陶磁器

報告書抄録

ふりがな	しもむらいせき こながさわにいせき こながさわかまぶたいせき はっくつちょうさほうこく										
書名	下邑遺跡 小長沢Ⅲ遺跡 小長沢鍊蓋遺跡 発掘調査報告										
別冊名	県営農地整備事業小長沢地区に伴う埋蔵文化財発掘報告										
著者											
シリーズ名	富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告										
シリーズ番号	第80集										
翻訳者名	町田賀・										
翻訳機関	公益財團法人富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査課										
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229										
施行年月日	西暦 2024年3月15日										
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因				
下邑遺跡	富山市 婦中町 小長沢	16201 362027	36度 39分 41秒	137度 7分 49秒	20221007～20221026	158.0	県営農地整備事業 小長沢地区 に伴う事前調査				
小長沢Ⅱ遺跡	富山市 婦中町 小長沢	16201 362146	36度 39分 59秒	137度 7分 55秒	20221027～20221128	281.0					
小長沢鍊蓋遺跡	富山市 婦中町 小長沢	16201 362180	36度 39分 52秒	137度 7分 51秒	20230724～20230801	56.0					
所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項						
下邑遺跡	集落	古代～近世、近代	津 自然流路	1 土師器、須恵器、中古土師器、珠浦、 越中漁貝、肥前系陶磁器、木製品	古代以降の自然流路と近代 の津を検出した。						
小長沢Ⅱ遺跡	集落	古代～近世、近代	津 落ち込み	7 繩文土器、弥生土器、土師器、珠浦、 青磁、白磁、肥前系陶磁器、木製品	古代以降の講群と落ち込み を検出した。						
小長沢鍊蓋遺跡	集落	古代～近世	自然流路	1 土師器、越中漁貝、肥前系陶磁器	古代以降の自然流路を検出 した。						
要約											
下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡・小長沢鍊蓋遺跡は、井手川や山田川と羽根丘陵とにはさまれた平野部両端に位置する。現況はいずれも水田である。今回の3遺跡の調査では建物などの遺構はみつからず、自然流路や焼物などの検出にとどまった。このことから、集落の津で山田川の支流とみられる自然流路やそこから人為的に作り出した水路の一部を検出したと考えられる。出土遺物は縄文時代から近世まであり、居住はないにせよ長期間にわたる土地の利用がうかがえる。また、小長沢地区ではじめて行った自然科学分析の結果、湿地環境の復元や年代推定が得ることができたのは大きな成果である。											

2024(令和6)年3月5日 印刷

2024(令和6)年3月15日 発行

富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第80集

下邑遺跡 小長沢Ⅱ遺跡 発掘調査報告 小長沢鍊蓋遺跡

～県営農地整備事業小長沢地区に伴う埋蔵文化財発掘報告～

編集・発行 公益財團法人富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査課
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印刷 キクラ印刷株式会社
〒933-0322 高岡市猪苗代48-2
TEL 0766-31-2794